

平成30年度

# 久留米市内遺跡群

市ノ上北屋敷遺跡（第6次調査）

汐入遺跡（第4次調査）

筑後国府跡（第290～292次調査）

平成31（2019）年3月

久留米市教育委員会

平成30年度

# 久留米市内遺跡群

市ノ上北屋敷遺跡（第6次調査）

汐入遺跡（第4次調査）

筑後国府跡（第290～292次調査）

平成31（2019）年3月

久留米市教育委員会

## 序

筑紫平野の中心に位置する久留米市は、九州最大の河川である筑後川と耳納連山の山並みに代表される水と緑が豊かな都市です。一方で、少子高齢化や高度情報化などの社会環境の変化に対応するために、本市では市民と行政がパートナーシップの理念の基に協働し、質の高い生活中心の街づくりを推進しております。また、豊富な水と緑を活かした、歴史が見えるまちづくりを実現するため、歴史風土の継承に尽力しているところです。

この恵まれた環境と立地は、今日を生きる私たちだけでなく、先人の生活や社会・文化にも多大な影響を与えてきました。先人の足跡は、市内各所に存在する文化財として現代に残されています。私ども教育委員会では、開発によって失われる、先人の残した貴重な文化財を後世に伝えて行くために、現状保存、あるいは発掘調査を行って、記録保存の措置を講じています。

今回、本書で報告するのは平成28年度から平成30年度に国費・県費補助を受けて発掘調査が実施された遺跡です。

本書が、地域史の研究や学習の一資料として、また文化財保護行政に対する理解と普及の一助として役立つことができれば幸いに存じます。

末文となりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ、関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成31年 3月31日

久留米市教育委員会  
教育長 大津 秀明

## 例 言

1. 本書は、平成28年度から平成30年度に久留米市市民文化部文化財保護課が国費・県費の補助を受けて実施した、久留米市内遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の神保公久と江頭俊介西拓巳、小川原励、大隈彩未が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の測量は、調査担当者と発掘調査臨時職員の大熊澄子、大淵文子、山口誠也、山田治代が行った。遺構配置図はトータルステーションで三次元データを取得し、株式会社CUBIC製遺構実測ソフト「遺構くんcubic」にて編集・保存した。土層は、手測り(1/10)で作成した。
4. 遺物実測は、調査担当者と専任非常勤職員の宮崎彩香、整理作業臨時職員の丸山裕見子が行った。拓本作成は、当課職員の長谷川桃子と丸山が行った。
5. 遺構・遺物の製図作業は、調査担当者と専任非常勤職員の今村理恵、整理作業臨時職員の山元博子が行った。製図はデジタルトレースで行い、「遺構くんcubic」と米アドビシステムズ製描画ソフト「Adobe Illustrator CS6・CC」を用いた。
6. 個別遺構写真は、各担当者が撮影した。使用したカメラは、マミヤRZ67・マミヤRB67である。撮影に用いた6×7版フィルムは、モノクロームが富士フィルム「ACROSS100」、カラーリバーサルが富士フィルム「PROVIA100F」である。全景写真は、筑後国府跡第291次調査のみ有限会社空中写真企画に委託して撮影し、その他の遺跡は各調査担当者が撮影した。
7. 遺物写真は、市ノ上北屋敷遺跡と筑後国府跡の出土遺物は久留米市埋蔵文化財センターにおいて、各調査担当者と長谷川がCanonデジタルカメラD500で撮影した。汐入遺跡の遺物写真は、有限会社システム・レコに委託し撮影を行った。
8. 本書に使用した遺構図は、市ノ上北屋敷遺跡と汐入遺跡は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を、筑後国府跡は国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基に作成した。図版の方位は全て座標北を示す。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメータ補正は、汐入遺跡第4次調査及び筑後国府跡第292次調査では行い、それ以外の調査については行っていない。
9. 本書に使用した遺構標記は下記の略号による。

S A……柱列	S B……掘立柱建物	S D……溝
S F……道路遺構	S K……土坑	S I……竪穴建物
S P……ピット	P……柱穴	
10. 遺構番号は、原則調査毎に付した。ただし筑後国府跡に関しては、隣接する過去の調査地点で検出された遺構と同一と判断した遺構は、過去の調査で付した番号を踏襲した。なお筑後国府跡の遺構番号は、平成8年度以降調査毎に付しているが、それ以前の調査では4桁の通し番号を付している。そのため、他の調査地点の遺構は遺構標記の前に調査次数を付して区別した。

(例) 第291次調査の掘立柱建物 S B 1 → 291 S B 1

11. 本文中と実測図、写真図版の遺物番号は同一である。
12. 遺物観察表の凡例は以下の通りである。
  - ・法量の単位はcmである。〔 〕は復元値、( )は残存値を、－は欠損または該当する部位が無いことを示す。
  - ・色調は『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、昭和42年）に拠った。
  - ・胎土は、0.5mm未満の砂粒を「微砂粒」、1.0mm未満を「細砂粒」、1.0mm以上を「砂粒」とした。
  - ・登録番号は、久留米市市民文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 2 0 1 6 1 2 - 0 0 0 0 0 1

調査番号                  登録番号

13. 各遺跡の調査番号、遺跡略記号は第1表に記した。報告書掲載順については原則調査着手順であるが、本書では便宜上、筑後国府跡の報告を後半にまとめた。遺跡略記号については(略記号)－(調査回数)の順で記載した。
14. 本書に収録した遺物及び調査に係わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される。
15. 本書の執筆は各担当者が行い、文責は本文目次及び文末に記した。全体の編集は、各担当者と協議の上、大隈が担当した。

# 本文目次

I. はじめに	(大隈) 1
II. 市ノ上北屋敷遺跡 (第6次調査)	(江頭) 3
III. 汐入遺跡 (第4次調査)	(西) 14
IV. 筑後国府跡 (第290次調査)	(大隈) 32
V. 筑後国府跡 (第291次調査)	(大隈) 41
VI. 筑後国府跡 (第292次調査)	(小川原) 51
[巻末] 報告書抄録	55

# 挿図目次

## II. 市ノ上北屋敷遺跡 (第6次調査)

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	4	第8図 SK1完掘状況 (南西から)	10
第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)	4	第9図 SK2完掘状況 (北西から)	10
第3図 遺構配置図 (1/100)	6	第10図 SK25完掘状況 (北西から)	10
第4図 SI22、SK1、SK2、SK25、SD3遺構 実測図 (1/40)	7	第11図 攪乱1土層断面 (北から)	10
第5図 遺物実測図 (1/4、1/2)	8	第12図 出土遺物写真①	11
第6図 北区近景 (南から)	10	第13図 出土遺物写真②	12
第7図 南区近景 (南から)	10	第14図 出土遺物写真③	13

## III. 汐入遺跡 (第4次調査)

第15図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	14	第26図 表土剥ぎ風景 (北西から)	25
第16図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)	15	第27図 調査風景 (東から)	25
第17図 遺構配置図 (1/100)	16	第28図 調査区全景 (西上空から)	25
第18図 調査区北壁西部土層図 (1/20)	17	第29図 SA25完掘状況 (西上空から)	26
第19図 SA25実測図・土層図 (1/40、1/20)	17	第30図 SA25P1土層 (東から)	26
第20図 SK1実測図 (1/40)	18	第31図 SA25P2土層 (東から)	26
第21図 SD30断面図 (1/20)	18	第32図 SA25P3土層 (東から)	26
第22図 SK11実測図・土層図 (1/40)	19	第33図 SK1完掘状況 (東から)	26
第23図 出土遺物実測図1 (1/4)	20	第34図 SK11完掘状況 (北西上空から)	26
第24図 出土遺物実測図2 (1/2、1/4)	21	第35図 SD30完掘状況 (南西から)	26
第25図 土錘出土遺跡分布図 (1/25,000)	24	第36図 SD30土層状況 (南西から)	26

第37図	出土遺物写真①	27
第38図	出土遺物写真②	28
第39図	出土遺物写真③	29

第40図	出土遺物写真④	30
第41図	出土遺物写真⑤	31

#### IV. 筑後国府跡（第290次調査）

第42図	調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）	33
第43図	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	33
第44図	調査区遺構配置図（1/1,500）	34
第45図	A・B区遺構配置図（1/100）	35
第46図	C・D区遺構配置図（1/100）	36
第47図	E区遺構配置図（1/100）	37
第48図	F区遺構配置図（1/100）	38
第49図	A区南部検出状況（南から）	39
第50図	A区北部検出状況（北から）	39
第51図	B区南部検出状況（南から）	39
第52図	B区北部検出状況（北から）	39
第53図	C区南部検出状況（南から）	39

第54図	C区中央部検出状況（南から）	39
第55図	C区北側検出状況（南から）	39
第56図	C区土層（西から）	39
第57図	D区南部検出状況（南から）	40
第58図	D区北部検出状況（北から）	40
第59図	D区土層断面（東から）	40
第60図	E区南部検出状況（南から）	40
第61図	E区検出状況（北から）	40
第62図	E区検出状況（北から）	40
第63図	F区南部検出状況（南から）	40
第64図	F区北部検出状況（北から）	40

#### V. 筑後国府跡（第291次調査）

第65図	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	41
第66図	遺構配置図（1/100）	42
第67図	S B 1 実測図（1/60）	44
第68図	S B 1 P 2・3 土層断面図（1/20）	44
第69図	出土遺物実測図（1/4）	44
第70図	筑後国府跡古宮地区主要遺構図（1/1,000）	47
第71図	調査区北部全景（北上空から）	48
第72図	調査区南部全景（南上空から）	48
第73図	調査区から高良川・筑後川を望む（南から）	49

第74図	調査風景（西から）	49
第75図	S B 1 検出状況 1（東から）	49
第76図	S B 1 検出状況 2（南から）	49
第77図	S B 1 P 2 土層（北から）	49
第78図	S B 1 P 3 土層（北から）	49
第79図	S B 5 検出状況（北西から）	49
第80図	S B 1・S B 5 検出状況（北西から）	49
第81図	出土遺物写真	50

#### VI. 筑後国府跡（第292次調査）

第82図	調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）	51
第83図	遺構配置図（1/100）	52
第84図	S K 15 実測図（1/20）	52
第85図	出土遺物実測図（1/4）	53

第86図	調査地全景（西から）	54
第87図	調査区東部完掘状況（北から）	54
第88図	調査風景（西から）	54
第89図	出土遺物写真	54

## 表 目 次

第 1 表	『平成30年度 久留米市内遺跡群』掲載遺跡一覧表	1
第 2 表	(市ノ上北屋敷遺跡第 6 次調査) 出土遺物観察表	9
第 3 表	(汐入遺跡第 4 次調査) 出土遺物観察表 1	22
第 4 表	(汐入遺跡第 4 次調査) 出土遺物観察表 2	23
第 5 表	(筑後国府跡第291次調査) 出土遺物観察表	45
第 6 表	(筑後国府跡第292次調査) 出土遺物観察表	53



1. はじめに

文化財保護課	課長	水島 秀雄 (平成30年度)
		馬場 博文 (平成28・29年度)
	課長補佐	久保田由美 (平成30年度)
		山崎万里子 (平成28・29年度)
	課長補佐兼主査	白木 守
		丸林 禎彦 (平成30年度)
	主査	水原 道範
	事務主査	塚本 映子
		豊福 早苗 (平成28年度)
	事前確認・調整担当	塚本 映子
		小澤 太郎 (平成30年度)
		神保 公久 (平成28・29年度)
		本田 岳秋 (平成28年度)
		橋之口雅子 (任期付非常勤職員)
	埋蔵文化財センター担当	熊代 昌之 (平成29・30年度)
		園井 正隆 (平成28年度)
	発掘調査・報告書作成担当	神保 公久・江頭 俊介・西 拓巳
		小川原 励・大隈 彩未・長谷川桃子
	整理担当 (専任非常勤職員)	米澤美詠子・宮崎 彩香
		今村 理恵 (平成30年度)
		岩坪 純子 (平成29・30年度)
		古賀 和子 (平成28年度)

発掘調査作業員

平成28年度

青木佐智子・石橋 康子・大坪 進・鐘江 清・國武 三歳・久保田英嗣・中村 正登  
福田 猛・森山美千代・柳 鈴子・山口 誠也・山下 洋子・山田 治代

平成29年度

秋永 絹子・案納 哲夫・井上 知義・江藤 光男・大熊 澄子・大塚ヒロ子・大淵 文子  
川原 初美・國武 三歳・田中とし子・東 南・堀江 俊文・松尾 朱美・柳 鈴子  
山田 治代

平成30年度

大淵 文子・川原 初美・田中とし子・東 南・松尾 朱美・矢野 崇徳

出土品整理作業臨時職員

野口 晴香

## II. 市ノ上北屋敷遺跡（第6次調査）

### 1. 調査に至る経緯

本調査は平成28年6月21日付で、土地所有者より久留米市合川町1877-28における、専用住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会が提出されたことに端を発する。調査地は周知の遺跡である市ノ上北屋敷遺跡の範囲内に含まれ、調査地を含む周辺は弥生時代の遺構が展開していると考えられた。そのため、土地所有者との協議の結果、建物建設予定地120㎡を調査の対象とし、平成28年9月12日より調査に入る運びとなった。

### 2. 位置と環境

本調査地点は、筑後川中流の左岸に突出した標高12mの低台地上に位置する。この半島状の低台地は通称「市ノ上台地」と呼ばれ、筑後川の水運を活かしつつ水害に強い土地として、古くから人類の生活の舞台となっている。縄文時代には本遺跡や、隣接する市ノ上西屋敷遺跡、市ノ上東屋敷遺跡で中期と後期の不定形土坑が検出され、中期から晩期の遺物が出土している。第5次調査では弥生時代の各遺構から縄文早期の押型文土器や中期の阿高式系土器、船元式土器が出土している。

弥生時代には市ノ上北屋敷遺跡で板付Ⅱ式の壺棺墓を含む7基の甕棺墓が検出されているほか、前期の円形竪穴住居や中期城ノ越～須玖式段階の竪穴住居などが検出されている。また、中期以前とされる「環状土坑列」遺構は、一辺1m四方の柱穴が12基、直径8mの環状に並んだもので、何らかの建物と考えられている。第1次～第3次調査では中期中葉の甕棺墓や祭祀土坑が検出されている。市ノ上西屋敷遺跡では、30基の甕棺墓や石棺墓が検出され、石棺墓から半裁された内行花文鏡が出土している。市ノ上東屋敷遺跡では前期及び中期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。

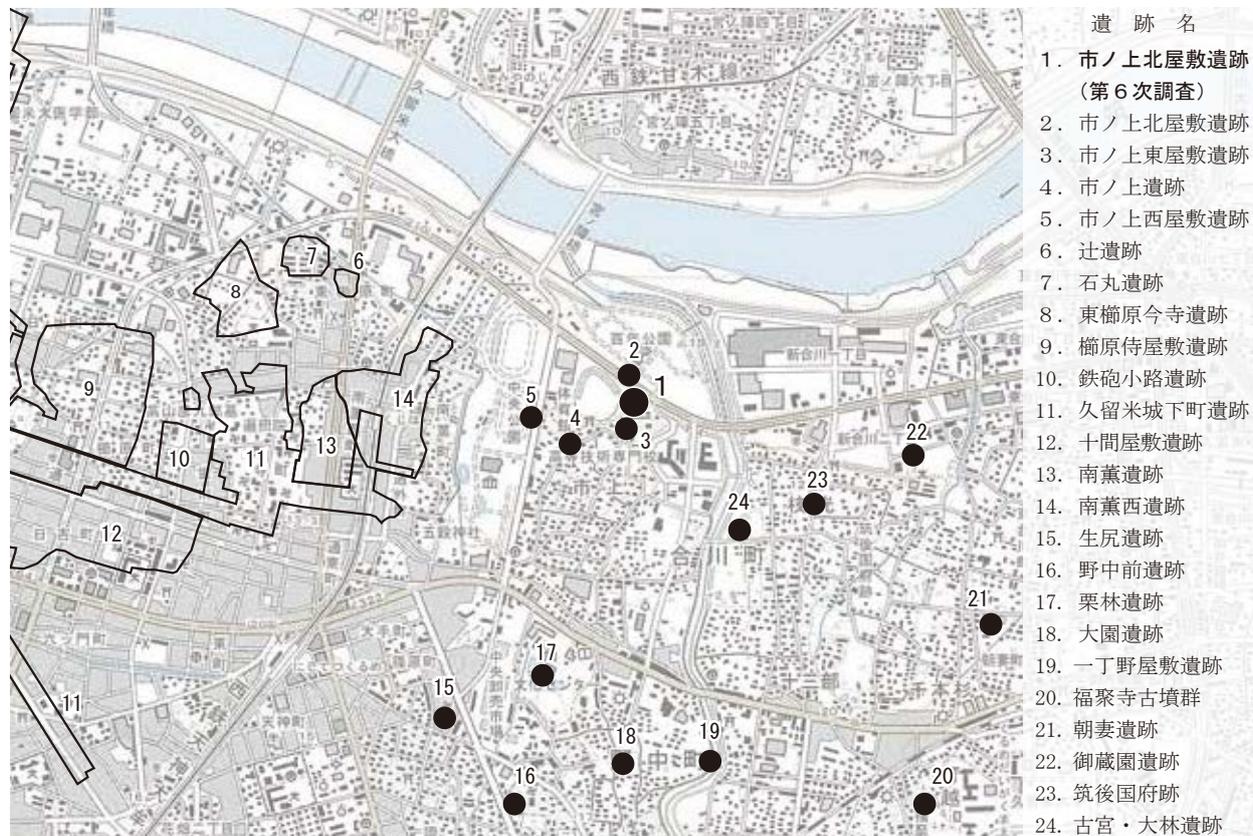
古墳時代初頭には市ノ上東屋敷遺跡で一辺約22mの方形区画をなす溝とそれに伴う柵列が検出されている。区画内部には溝と軸を同じくし、同時期と見られる2×3間の掘立柱建物があり、居館的な性格が想定されている。

市ノ上西屋敷遺跡では、平安時代の土坑墓3基と室町時代の土坑墓が10基検出されている。また、戦国期の断面V字形の溝も検出されており、直角に屈曲することから何らかの区画をなすものと見られる。文禄2年（1593）の「高良社神職名知行所数注文案」によると、市ノ上には大祝領10町とその家臣領8町が所在したことがわかることから、高良山勢力に関連する遺構である可能性がある。

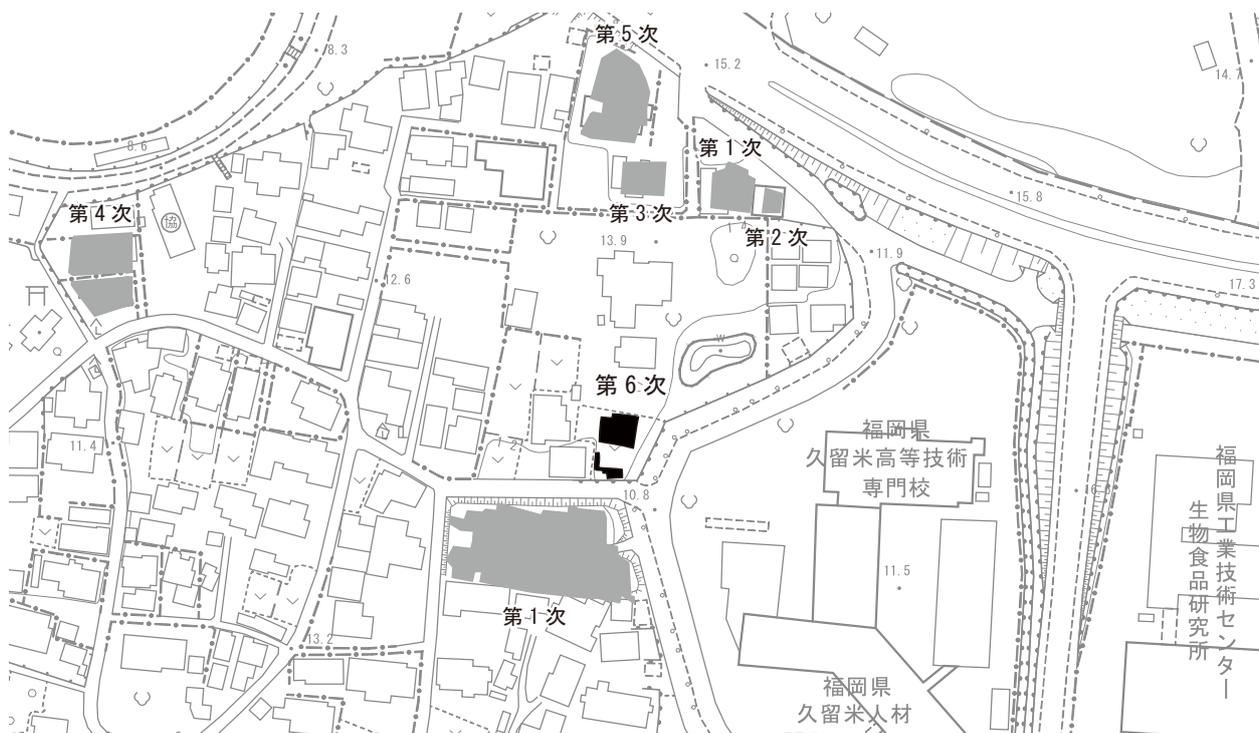
江戸時代の市ノ上村は500石前後の村高を持つ、城下町近郊の村落であった。ここには、久留米藩7代藩主有馬頼僮の生母（小林盛徳院）が藩士の下屋敷を召し上げて庭園を造り、文久3年（1863）から10代藩主頼永の室である晴姫が頼永の死後市ノ上御殿にて余生を過ごした。慶応2年（1866）

II. 市ノ上北屋敷遺跡（第6次調査）

には、十一代藩主有馬頼成が敷地の規模を拡張した。廃藩後も有馬家が所有したが、明治11年（1878）には合川小学校が別邸内に開校し、明治33年（1900）に合川町御蔵園の現在地に移転するまで、校舎として使われた。



第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査の位置と周辺地形図 (1/2,500)

### 3. 調査の記録

#### （1）調査の経過

調査は平成28年9月12日から開始する予定だったが、雨天のためトイレの搬入のみ行った。翌日から調査区及び駐車場の草刈りを行い、9月15日から重機による表土剥ぎを実施した。北区では地表下1mで黄褐色粘質土の地山を検出した。調査地は北から南に傾斜しており、南区では、地表下0.5mで同様の地山を検出した。その後台風等の降雨により進捗が悪かったが、10月6日にスカイマスターによる写真撮影を行い、翌10月7日には埋戻しを行った。週が明けた10月13日に撤収作業を行い、調査を終了した。遺構の測量データは株式会社CUBIC社製ソフト「遺構くんcubic」にて編集・保存している。また、記録写真は6×7判で撮影した。

#### （2）検出遺構

今回の調査では、竪穴建物2棟、土坑3基、溝1条、ピット等を検出した。なお、調査区の大部分を、近代の複数の攪乱が占めており、調査地の立地上、市ノ上御殿等の資料として重要であることから、攪乱1・7のみ部分掘削を行い、遺物の収集を行った。以下、年代順に述べる。

#### 弥生時代の遺構

##### 竪穴建物

##### S I 4（第3図）

北区北端で検出された長さ3.5m以上、幅0.7m以上、床面までの深さ0.1mの竪穴建物である。北側と西側は調査区外へ伸びる。平面形状は方形と見られ、壁面は直立する。時期不明のピットと切り合っている。床面は貼床であり、平坦である。床面の下には、深さ0.2mの掘方を有する。埋土は暗褐色を呈する。遺物は、黒曜石やサヌカイトの剥片のみ出土した。

##### S I 22（第3・4図）

北区北側で検出された長さ2.6m以上、幅1.3m以上、深さ0.3mの竪穴建物である。貼床はなく、底面は平坦である。平面形状は隅丸方形を成し、壁面は直立する。埋土は暗褐色を呈する。遺物は弥生時代中期の甕の口縁部片や細片が出土した。

##### 土坑

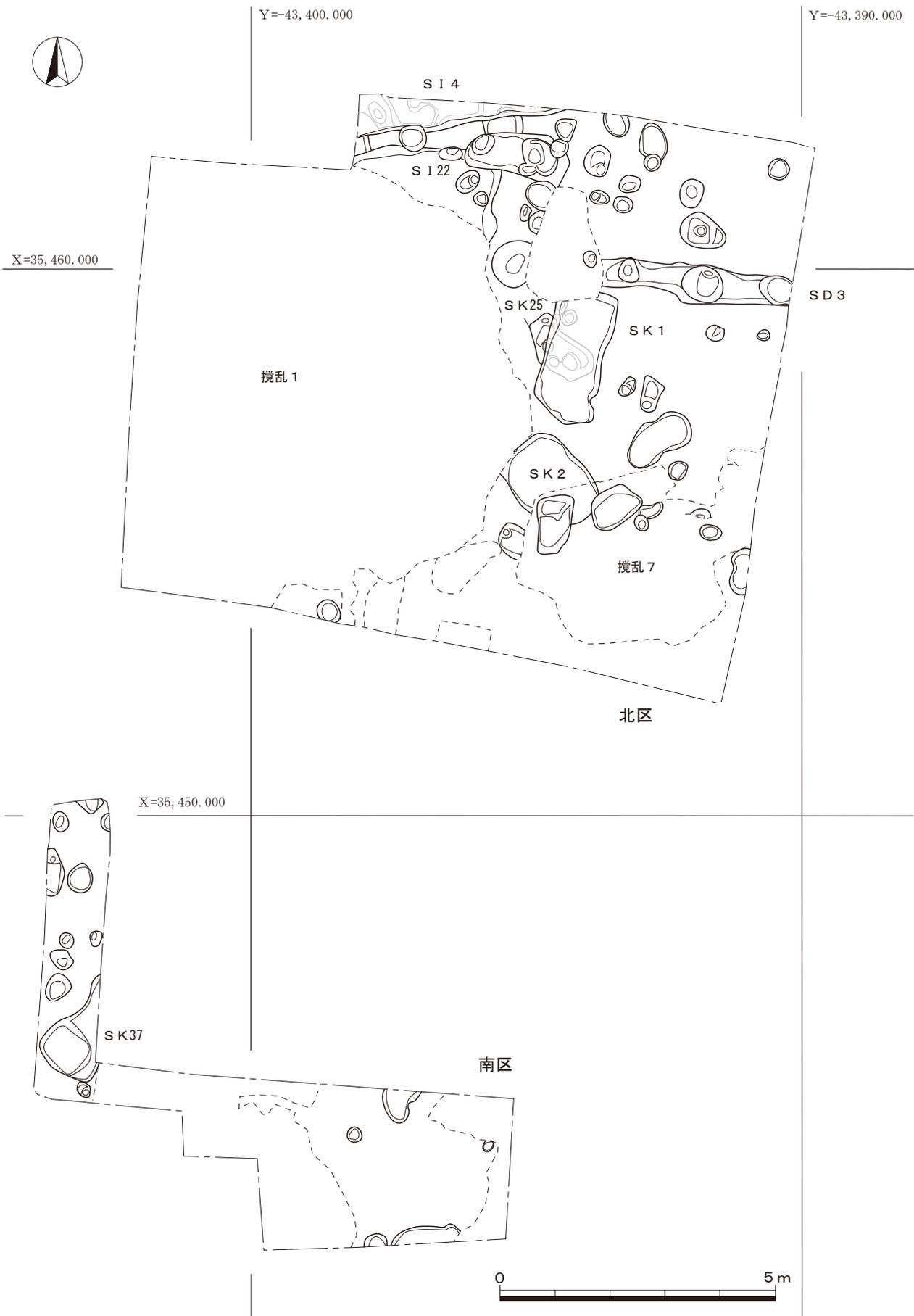
##### S K 1（第3・4図）

北区中央で検出された長さ2.4m、幅1.0m、深さ0.3mの土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は逆台形を呈する。北側を攪乱が後出する。埋土は暗褐色を呈する粘質土である。遺物は、近世陶器の土瓶や摩滅が著しい弥生土器の破片などが出土した。

##### S K 2（第3・4図）

北区南側で検出された長さ1.7m、幅0.2m、深さ0.2mの土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は逆台形を呈する。遺構の南東側を攪乱に切られる。埋土は暗褐色を呈する粘質土である。遺物は、摩滅が著しい弥生土器片が出土した。

II. 市ノ上北屋敷遺跡（第6次調査）



第3図 遺構配置図 (1/100)

SK25（第3・4図）

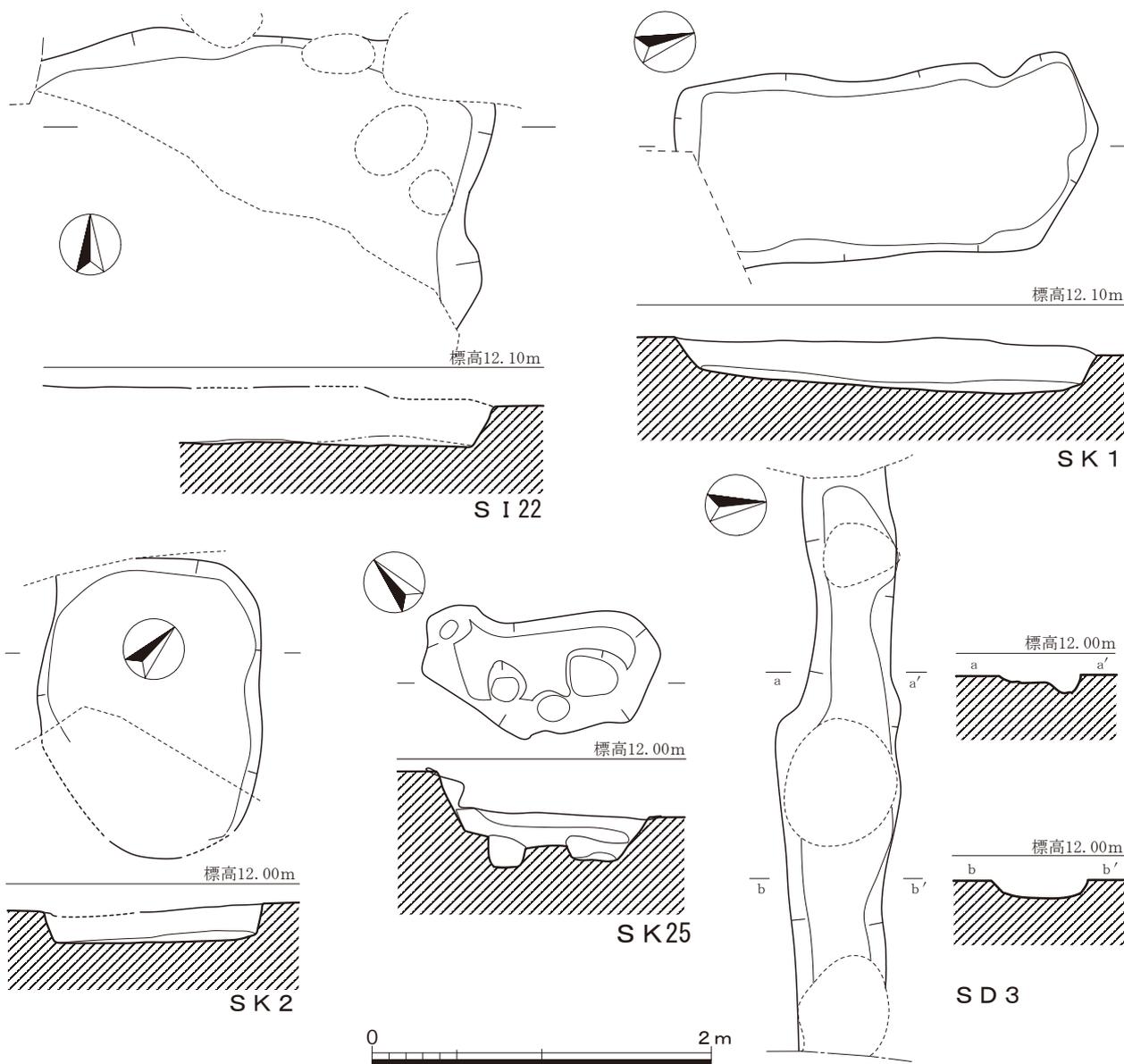
北区中央で検出された長さ1.3m、幅0.6m、深さ0.4mの土坑である。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。SK1が後出する。埋土は暗褐色を呈する粘質土である。遺物は、弥生時代中期の甕などが出土した。

年代不明の遺構

溝

SD3（第3・4図）

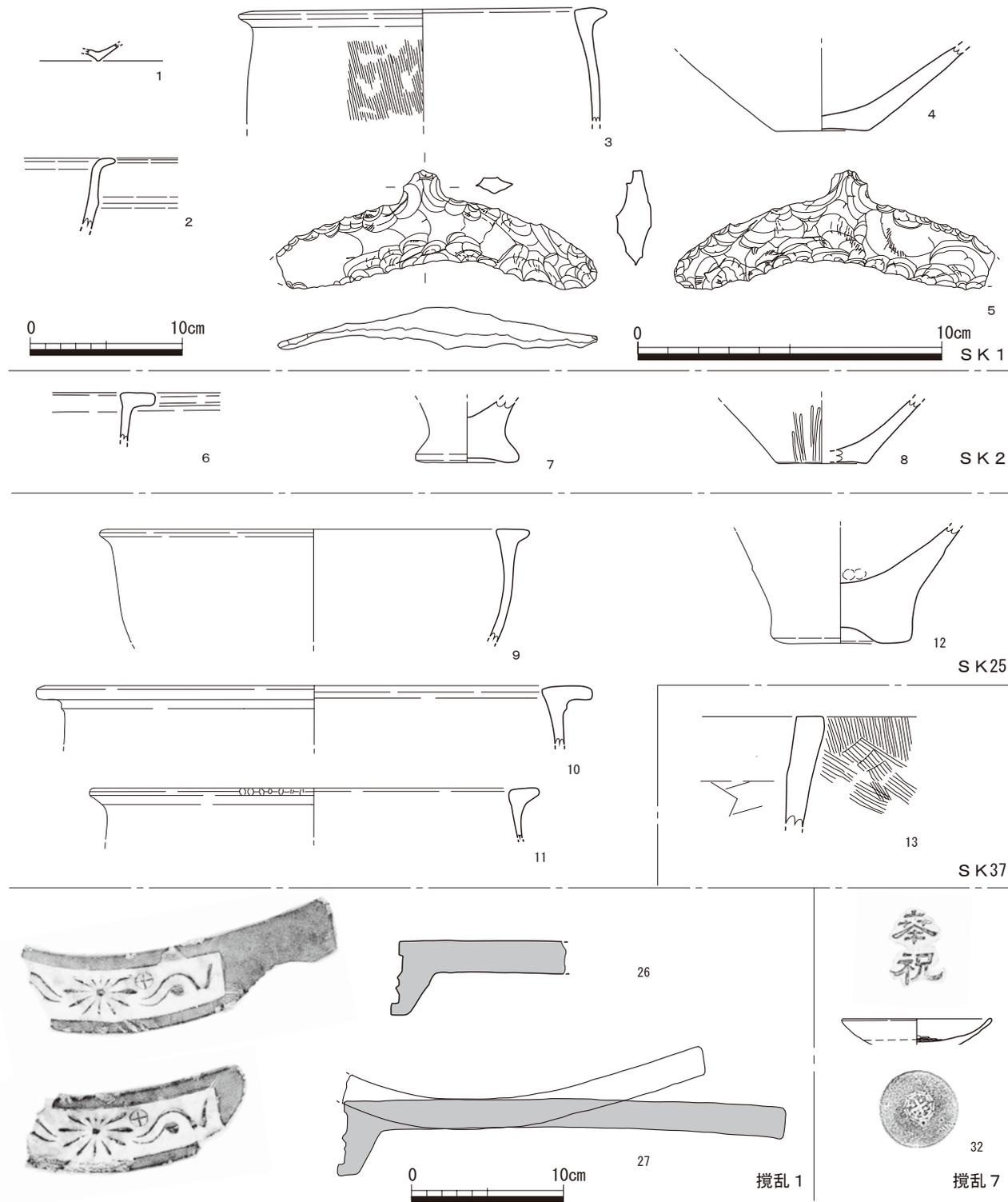
北区東側で検出された長さ3.4m以上、幅0.7m、深さ0.2mの溝である。平面形は直線を成し、断面形は半円形を呈する。軸はN-96°-Eである。埋土は、暗褐色を呈する粘質土である。遺物は出土していない。時期不明の3基のピットが後出する。



第4図 S I 22、SK 1、SK 2、SK 25、SD 3 遺構実測図（1/40）

（3）出土遺物

遺構からは、弥生土器、石器等パンコンテナー6箱の遺物が出土した。また、攪乱から夥しい量の近代陶磁器等が出土したが、現地にて特に時期や性格がわかるものについてのみ取り上げた。遺物の詳細は、遺物観察表を参照願いたい。



第5図 遺物実測図 (1/4、1/2)

第2表 出土遺物観察表

遺物 番号	図番号	出土 遺構	材質	器種	法量			色調		調整(文様)			胎土・備考	登録 番号
					口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面	底面 高台 内印銘等		
1	第5図	SK1	陶器	土瓶	-	-	1.1	浅黄	浅黄	露胎	-	-	精良	201612 000001
2	第5図	SK1	弥生土器	甕	-	-	4.7	にぶい橙	橙	-	-	-	2mmの砂粒やや多い、角閃石、石英	201612 000002
3	第5図	SK1	弥生土器	甕	(22.2)	-	7.4	にぶい橙	にぶい橙	ナデ、ハケメ	-	-	1mmの砂粒を少量含む、赤色粒子、角閃石	201612 000003
4	第5図	SK1	弥生土器	壺	-	(6.0)	5.5	にぶい橙	褐灰	-	-	-	1~2mmの砂粒を多量に含む、金雲母	201612 000004
5	第5図	SK1	石製品	石匙	(10.7)	2.9	0.9	灰色	灰色	-	-	-	堆積岩、24g	201612 000019
6	第5図	SK2	弥生土器	甕	-	-	3.2	橙	橙	-	-	-	1mmの砂粒を多く含む、金雲母	201612 000006
7	第5図	SK2	弥生土器	甕	-	(6.6)	4.0	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	-	ナデ	1~2mmの砂粒を多量に含む	201612 000007
8	第5図	SK2	弥生土器	壺	-	(5.6)	4.2	褐灰	にぶい橙	ミガキ	ナデ	工具ナデ	赤色粒子、角閃石	201612 000008
9	第5図	SK25	弥生土器	甕	(28.0)	-	7.4	にぶい橙	橙	ナデ、工具ナデ	工具ナデ	-	1mmの砂粒を少量含む、金雲母	201612 000013
10	第5図	SK25	弥生土器	甕	(35.4)	-	3.9	にぶい橙	にぶい橙	-	-	-	1mmの砂粒を多量に含む	201612 000014
11	第5図	SK25	弥生土器	甕	(29.2)	-	3.3	橙	橙	-	-	-	1mmの砂粒を多く含む	201612 000015
12	第5図	SK25	弥生土器	甕	-	9.0	7.7	にぶい橙	灰黄褐	-	ナデ、ユビオサエ	ナデ	1~2mmの砂粒を多量に含む	201612 000016
13	第5図	SK37	土師器	甕	-	-	7.3	橙	橙	工具ナデ、ハケメ	ケズリ、工具ナデ	-	2mm程度の砂粒を多く含む、赤色粒子	201612 000018
14	第14図	攪乱1	磁器	碗	9.8	3.0	4.0	染付(手書き)		「本」「木」「花」	機械轆轤痕	砂目	精良	201612 000020
15	第14図	攪乱1	磁器	碗	11.2	3.5	4.3	染付(型紙摺)		牡丹文、青海波文窓に山水楼閣文	瓔珞文	機械轆轤痕	精良	201612 000021
16	第14図	攪乱1	磁器	碗	[11.0]	4.3	4.6	染付(型紙摺)		牡丹唐草文	瓔珞文、三足ハマ	機械轆轤痕	精良	201612 000022
17	第14図	攪乱1	磁器	碗	9.9	3.5	3.7	染付(型紙摺)		青海波文、菊文	瓔珞文	-	精良	201612 000023
18	第14図	攪乱1	磁器	碗	[11.0]	3.4	4.2	色絵金彩		楓文	楓文	-	精良	201612 000024
19	第14図	攪乱1	磁器	蓋	10.2	3.8	2.6	染付(銅版印刷)		亀文、波文、四方襷文、笹竜胆文、鶴文、松竹梅文	機械轆轤痕	-	精良	201612 000025
20	第14図	攪乱1	磁器	中皿	[13.6]	8.6	3.7	染付(型紙摺)		花唐草	窓に草花文、松竹梅文	蛇の目高台	精良	201612 000026
21	第14図	攪乱1	磁器	小皿	10.9	6.4	1.8	染付(銅版印刷)		-	窓に格子文、松竹梅文	-	精良	201612 000027
22	第14図	攪乱1	磁器	盃	7.3	3.9	4.3	染付(銅版印刷)		牡丹文	-	「屋久満製」	精良	201612 000028
23	第14図	攪乱1	磁器	盃	6.9	3.3	4.5	染付(銅版印刷)		漢詩	-	團線	精良	201612 000029
24	第14図	攪乱1	土師器	瓶	-	(5.5)	5.8	浅黄橙	浅黄橙	「三井郡合川村市上」、 「□川さく」、人面、俵	-	「明治三十九年八月貳拾」		201612 000030
25	第14図	攪乱1	陶器	急須蓋	5.7	-	2.0	にぶい褐		青海波、波、千鳥	-	-	精良	201612 000032
26	第5図	攪乱1	瓦	軒平	[10.8]	10.8	2.0	黒色(いぶし銀)		丸に十字の陽刻、ナデ	ナデ	-	白色粒子、雲母、角閃石含む	201612 000033
27	第5図	攪乱1	瓦	軒平	29.0	25.6	2.0	黒色(いぶし銀)		丸に十字の陽刻、ナデ	ナデ	-	白色粒子、雲母、角閃石含む	201612 000031
28	第14図	攪乱1	瓦	軒丸	[24.7]	14.2	(10.4)	黒色(いぶし銀)		ナデ	布目	-	白色粒子、雲母、角閃石含む	201612 000034
29	第14図	攪乱1	磁器	機械栓	-	2.6	2.9	白磁		-	-	-	鉄製の金物が付属 明治～昭和初期	201612 000035
30	第14図	攪乱1	磁器	機械栓	-	2.4	2.8	白磁		-	-	-	鉄製の金物が付属 明治～昭和初期	201612 000036
31	第14図	攪乱7	陶器	急須	7.8	5.4	9.4	褐灰		陰刻「萬古」	回転ナデ	布目、上げ底	萬古焼。近代	201612 000037
32	第5図	攪乱7	土師器	小皿	9.9	5.0	1.8	灰白	淡黄	回転ヘラケズリ	陽刻「奉祝」、ナデ、 雲母塗布?	回転ヘラケズリ 久留米市章の陰刻	筑前系(博多瓦町または野間皿山)か	201612 000038
33	第14図	攪乱7	磁器	盃	5.3	2.0	3.0	白磁		菊文・桜の陽刻	-	-		201612 000039

#### 4. 総括

今回の調査で検出されたSK1、SK2、SK25の時期は、出土遺物（1～4、6～12）から弥生時代中期であることが窺え、周辺の調査区でも検出されている集落の広がりが確認できた。竪穴住居の年代は、遺物が極めて少なく不明である。SK1から堆積岩系の石匙（5）が1点出土しているが、北側の第1～5次調査において縄文時代の遺構が検出されていることをにみて、縄文時代の遺構からの混入と考える。直径7m以上を測る巨大な攪乱1は出土した陶磁器（14～23）や、「明

II. 市ノ上北屋敷遺跡（第6次調査）

治三十九年」銘のある墨書土器（24）から明治39年（1906）以降の年代が得られる。この遺構からは、丸に十字の紋があしらわれた軒平瓦（26、27）が出土しており注目される。紋は瓦当面にあることから、製作者の記号などではなく、居住者の属性を表現している可能性が高い。幕末から当地に居住した十代藩主頼永の室晴姫が薩摩藩主島津齐宣の娘であることと関連しているのであろうか。また、同じく明治末期以降とみられる攪乱7からは、底部に久留米市市章（明治44年制定）が印刻された土師器盃が出土した。居住者が入手したものと考えられるが、陸軍特別大演習や市町村合併、即位記念など候補となる催事が多く、確定することができない。（江頭）



第6図 北区近景（南から）



第7図 南区近景（南から）



第8図 SK1完掘状況（南西から）



第9図 SK2完掘状況（北西から）



第10図 SK25完掘状況（北西から）

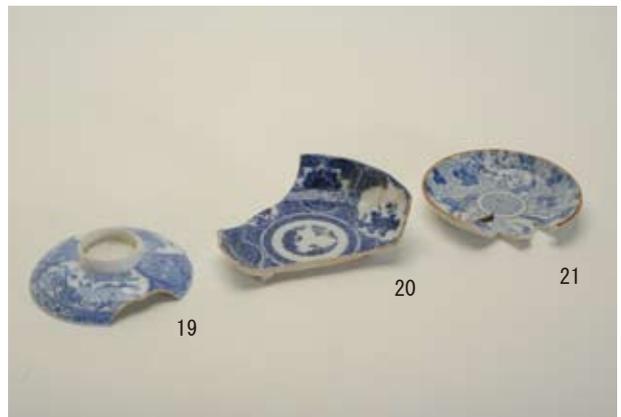


第11図 攪乱1土層断面（北から）



第12図 出土遺物写真①

Ⅱ. 市ノ上北屋敷遺跡（第6次調査）



第13図 出土遺物写真②



第14図 出土遺物写真③

# III. 汐入遺跡（第4次調査）

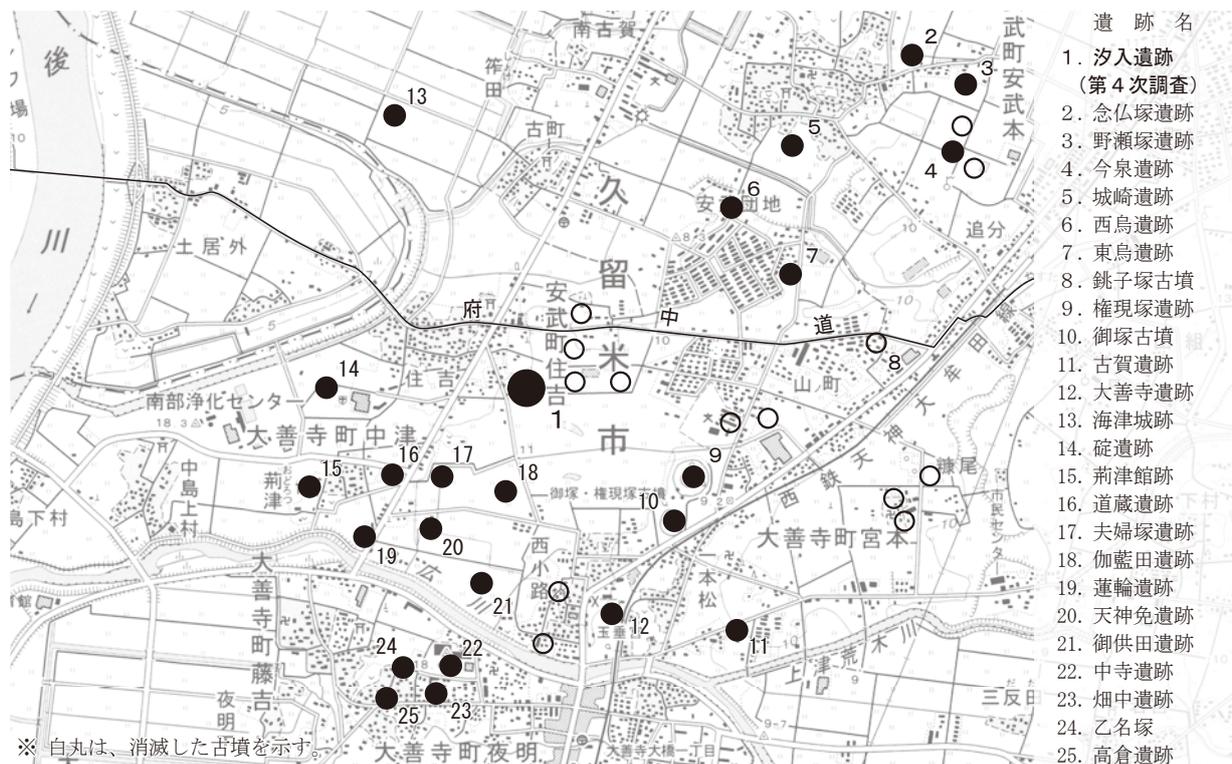
## 1. 調査に至る経緯

本調査は久留米市安武町で実施した、専用住宅建設に先立つ発掘調査である。平成29年10月2日、土地所有者から久留米市安武町住吉1399-2の一部における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である汐入遺跡に当たり、平成25年度に調査を行った第2次調査A区の北西に位置する（注1）。10月13日の確認調査でも地表下30cmで遺構を検出し、工事計画では遺構面と基礎の間に保護層が確保できないことから、10月14日、土地所有者に対して発掘調査が必要である旨を回答した。10月18日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、10月30日から11月10日まで現地での発掘調査を実施した。調査面積は68㎡である。

## 2. 位置と環境

筑紫平野を流れる筑後川は、宝満川と合流して流れを南西へと変える。その左岸には、筑後川や広川、上津荒木川によって形成された氾濫平野が広がり、砂礫台地が点在する。汐入遺跡はこうした砂礫台地上に立地し、第4次調査地点は標高約9mを測る。

周辺では、今泉遺跡から80基以上のおとし穴状遺構が検出されており、縄文時代には台地上が狩場だったことを示唆している。弥生時代には、汐入遺跡で早期の夜臼式土器や前期末の竪穴住居、



第15図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

木棺墓、土壙墓、中期の甕棺墓が見つかった。集落遺構は今泉遺跡や碇遺跡、道蔵遺跡でも確認されており、特に道蔵遺跡では二重環濠を伴う大規模な集落が営まれる。また、東鳥遺跡や古賀遺跡、道蔵遺跡、広川左岸の中寺遺跡や畑中遺跡、高倉遺跡で甕棺墓が検出されており、大善寺遺跡で大量の弥生土器が出土したことから、さらなる集落の存在が想定できる。

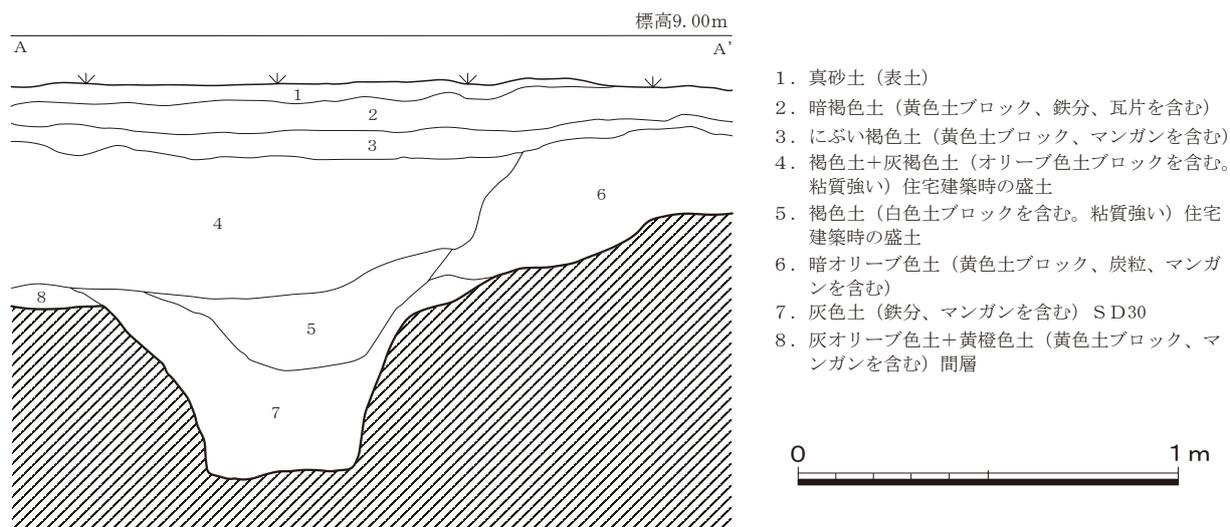
古墳時代には、「イロハ塚」と呼ばれるほど多数の古墳が築造されたが、大半が調査を経ずに消滅した。第4次調査地点の周辺では、東約100mにあったころび塚古墳や北東約180mにあった浦頭古墳があり、前者では金環、後者では「金の玉」が出土したと伝わる（注2）。古墳群の中心となる首長墓は、御塚古墳や銚子塚古墳、権現塚古墳が挙げられる。なお、汐入遺跡第1次調査では、鉄鍬を副葬した土壙墓や滑石製紡錘車を伴う溝が検出されており、集落の存在が窺える。

古代の安武町一带は、『和名類從抄』の三潞郡に当たる。道蔵遺跡では、正方方位に配置された8世紀後半～9世紀の建物群や道路遺構、越州窯系青磁碗や緑釉陶器が見つかり、三潞郡衙の可能性が指摘されている。汐入遺跡でも、7世紀後葉～9世紀の建物群が検出されており、床面積70㎡以上の大形建物や総柱建物、緑釉陶器、円面硯が確認されたことから、官人居住域の可能性が考えられている。8～10世紀にはこの他にも、野瀬塚遺跡や夫婦塚遺跡、伽藍田遺跡、蓮輪遺跡、御供田遺跡で集落遺構、今泉遺跡と天神免遺跡で館跡が見つかったほか、念仏塚遺跡では鍛冶に関する工房や公的施設と想定される建物群が検出された。広川左岸に位置する乙名塚は、農業改革に尽力し、養老2年（718）に筑後国守・肥後国守のまま死去した道君首名の墓と伝わる。

中世には、東寺が所有した最大の荘園である三潞荘に安武村の名があり、海津城跡や荊津氏館跡といった城館も点在する。また、高良山麓の府中から肥前へ通じる府中道も走り、水運・陸運上の要所であったことが想定される。今泉遺跡や城崎遺跡、西鳥遺跡、碇遺跡、道蔵遺跡、蓮輪遺跡、高倉遺跡で検出された区画溝や建物跡、井戸、土壙墓などは、屋敷や集落の点在を示唆している。



第16図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)



第18図 調査区北壁西部土層図（1/20）

は地山面で検出した。地山は、標高7.9mから上層が黄色土ブロックとマンガンを含む黄橙色粘質土、下層が灰白黄色粘質土である。

### （3）検出遺構

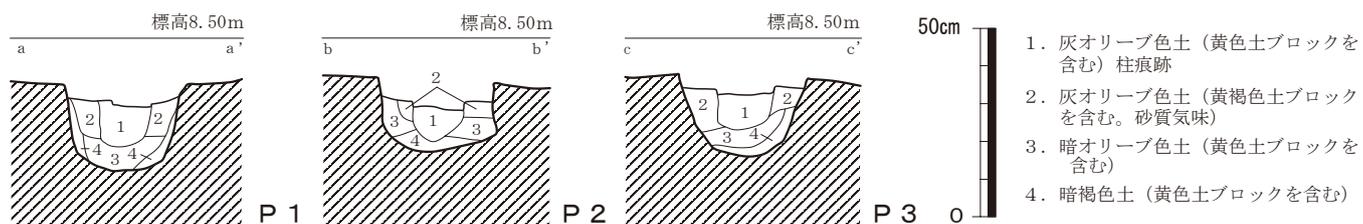
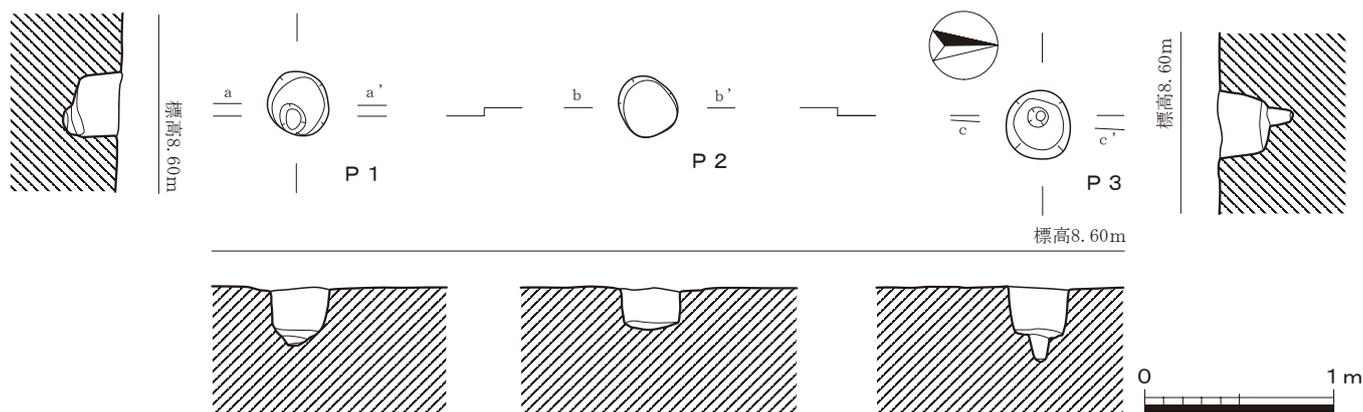
主な遺構として、古代の柱列1棟と土坑2基、近世の溝1条、その他ピットを検出した。以下、年代順に述べる。

#### 古代の遺構

##### 柱列

##### S A 25（第19・29～32図）

調査区西部で検出した遺構である。ピット3基の埋土や法量が類似する点から、同一の遺構と判



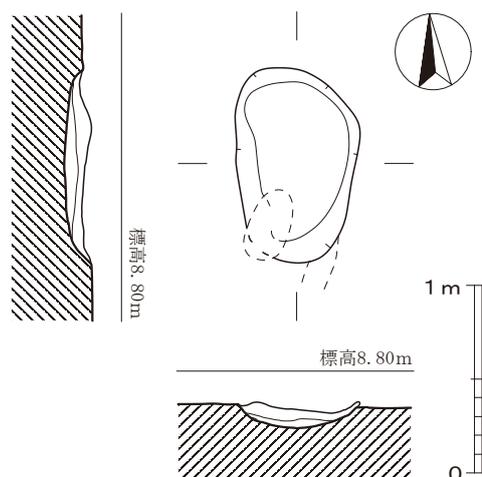
第19図 S A 25実測図・土層図（1/40、1/20）

断した。柱列としては短く、調査区外に及ぶ掘立柱建物の東壁部分の可能性もあるが、全貌が不明なので今回は柱列として報告する。柱間の距離は心芯距離で、P1-P2間が1.85m、P2-P3間が2.06mを測る。計画方位はN-1°-Eである。柱穴は円形の平面を呈し、直径0.32~0.37m、深さ0.23~0.38mを測る。いずれの柱穴でも、柱痕跡とみられる黄色土ブロックを含む灰オリーブ土の層を確認した。掘方は、暗褐色系またはオリーブ色系の粘質土が主体で、黄色土・黄褐色土ブロックを含む。遺物は、P3で土師器甕の細片4点と器種不明の細片7点が出土した。

### 土坑

#### SK1（第20・33図）

調査区南東部で検出した、歪な小判形の平面を呈す土坑である。一部を攪乱に削平されるが、長軸1.04m、短軸0.63mで、深さは0.13mを測る。埋土は黄色・灰色土ブロックや炭粒、鉄分を含むにぶい褐色土である。出土遺物は、土師器の把手と坏、甕、焼成粘土塊、焼石、黒曜石の剥片があるが、いずれも細片である。



第20図 SK1実測図（1/40）

#### SK11（第22・34図）

調査区南部で検出した、角の丸い三日月形の平面を呈する土坑である。南端は調査区外に延び、複数のピットが後出する。検出したのは長軸3.96mで、短軸2.57mを

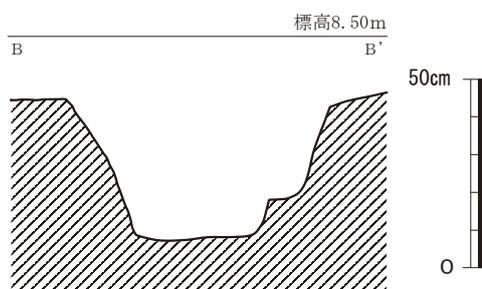
測る。深さは最大で1.42mを測り、複数の段を有する。なお土層観察から、壁面際の段は壁面の崩落に伴うものとみられる。埋土は第23図のとおりで、褐色系の土を中心に、炭や焼土を多く含む層や壁面崩落土を挟む、複雑な堆積状況を示す。遺物は、古代の土師器や須恵器、焼成粘土塊、土錘、砂岩製の砥石や軽石の丸礫、鉄滓などの鉄製品が出土した。焼成粘土塊や焼石の出土が目立ち、焼成粘土塊はパンコンテナー0.5箱分に達するほか、粘土塊が付着した土師器や鉄滓も出土した。

### 近世の遺構

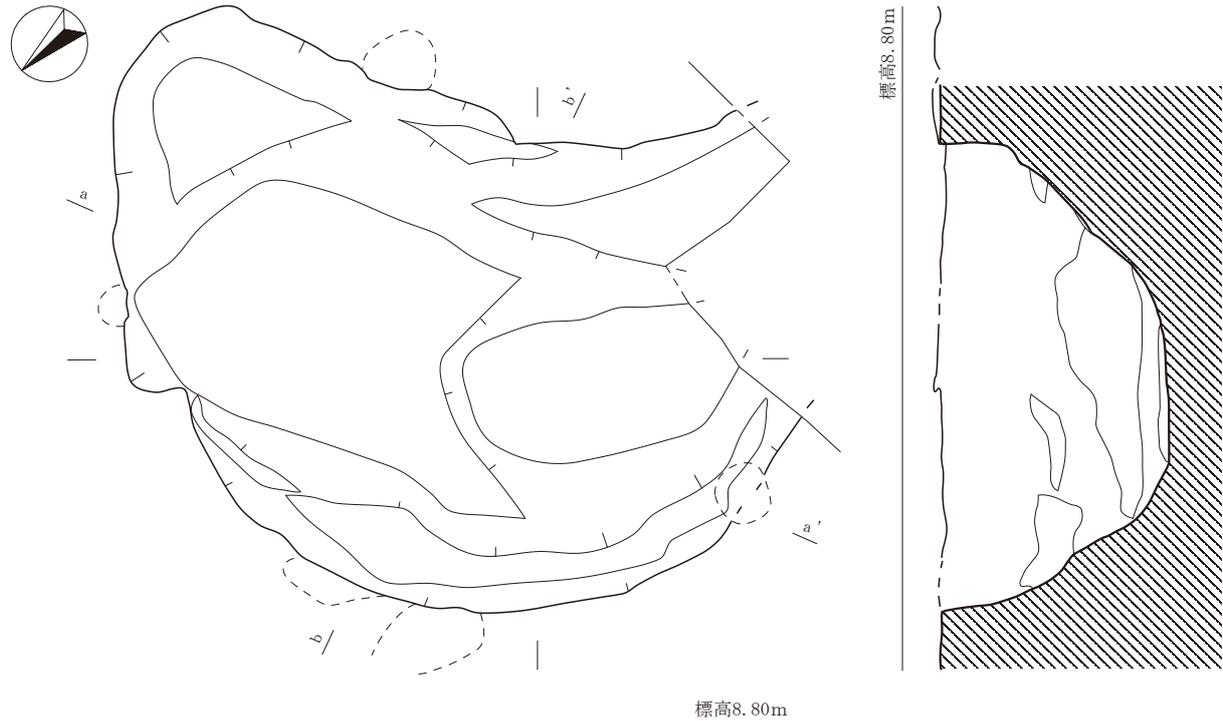
#### 溝

#### SD30（第18・21・35~36図）

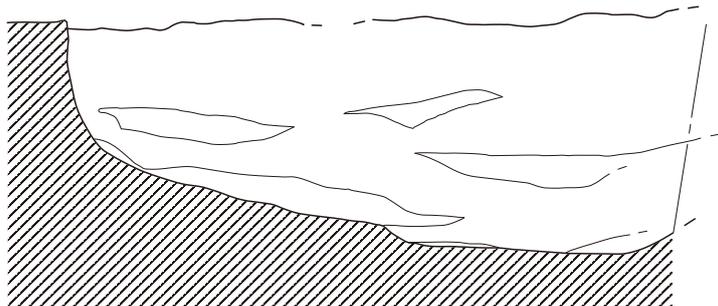
調査区西部を段落ちに沿って横切る溝である。走行方位はN-12°-E、両端は調査区外に及び、長さ8.55mのみ検出した。溝の断面は逆台形である。上端幅0.68~0.87m、下端幅0.35~0.46m、深さ0.38mを測り、中央付近では深さ0.25mに段を有する。埋土は第19図のとおりで、鉄分やマンガンを含む灰色土が占める。出土遺物は、古代の土師器や須恵器の坏と甕、近世の陶器鉢や染付碗の口縁部片がある。いずれも細片で、古代の遺物は摩耗が著しく混入品の可能性が高い。



第21図 SD30断面図（1/20）

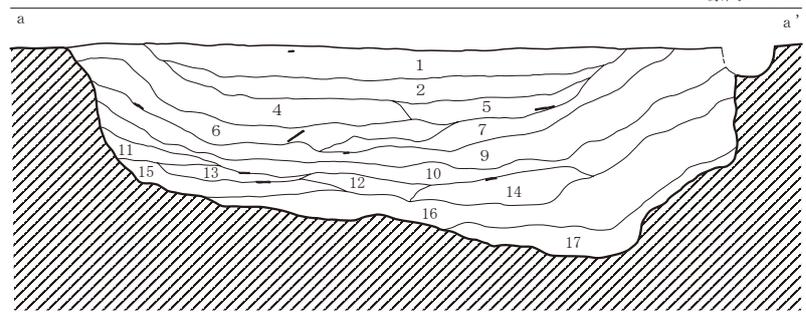


標高8.80m

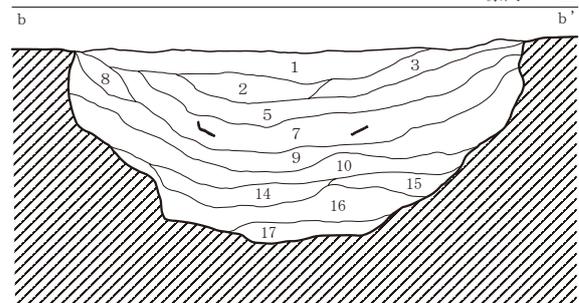


標高8.80m

1. 暗褐色土（黄褐色土、灰白色土ブロック、土器片を含む）
2. 暗褐色土（灰白色土ブロック、炭粒、土器片を含む）
3. 暗灰黄色土（暗褐色土、炭粒、土器片を含む）
4. 暗褐色土（灰色土ブロック、炭層、赤色粒子、土器片を含む）
5. 褐色土+黄色土（炭粒を含む。しまり固い）
6. 暗オリーブ色土（炭粒、焼土粒、土器片を含む）
7. にぶい褐色土（灰白色土、炭粒、焼土粒、土器片を含む）
8. 暗褐色土（オリーブ色土ブロック、土器片を含む）
9. 黄褐色土（黄色土ブロック、炭粒、土器片を含む）
10. 明オリーブ色土（炭層、土器片を含む）
11. 明オリーブ色土（焼土を多く含む）
12. 黄色土
13. オリーブ色土（炭層、土器片を含む）
14. 灰オリーブ色土（炭、焼土を多く含む、黄色土ブロック、土器片を含む）
15. 灰褐色土（灰色土、黄色土ブロック、炭粒、焼土粒、土器片を含む）
16. 青灰色土（オリーブ色土を含む。砂質）壁面崩落土
17. 灰オリーブ色土（灰色土ブロック、黒色粒子を含む。粘質強い）



標高8.80m

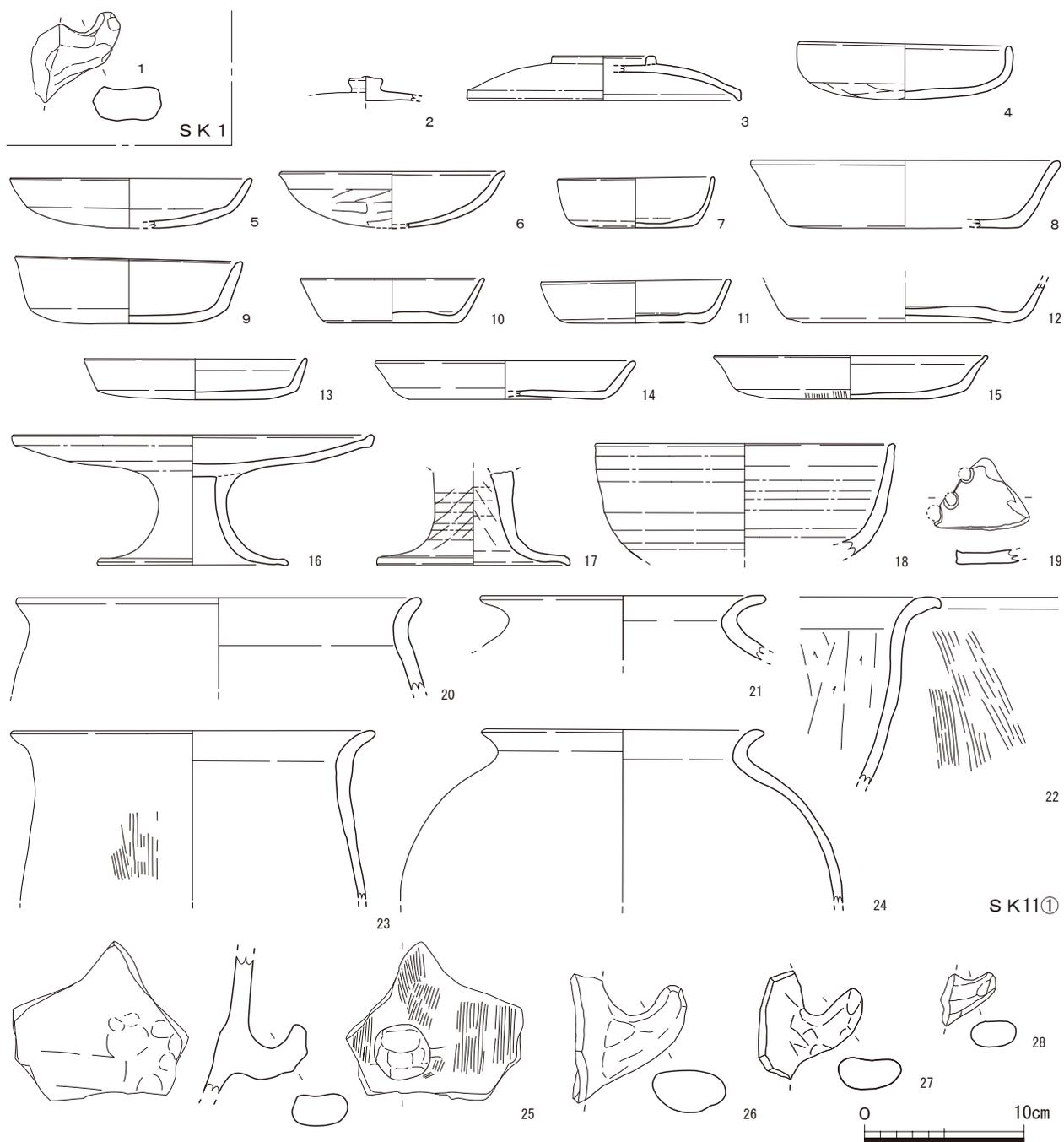


第22図 SK11実測図・土層図（1/40）

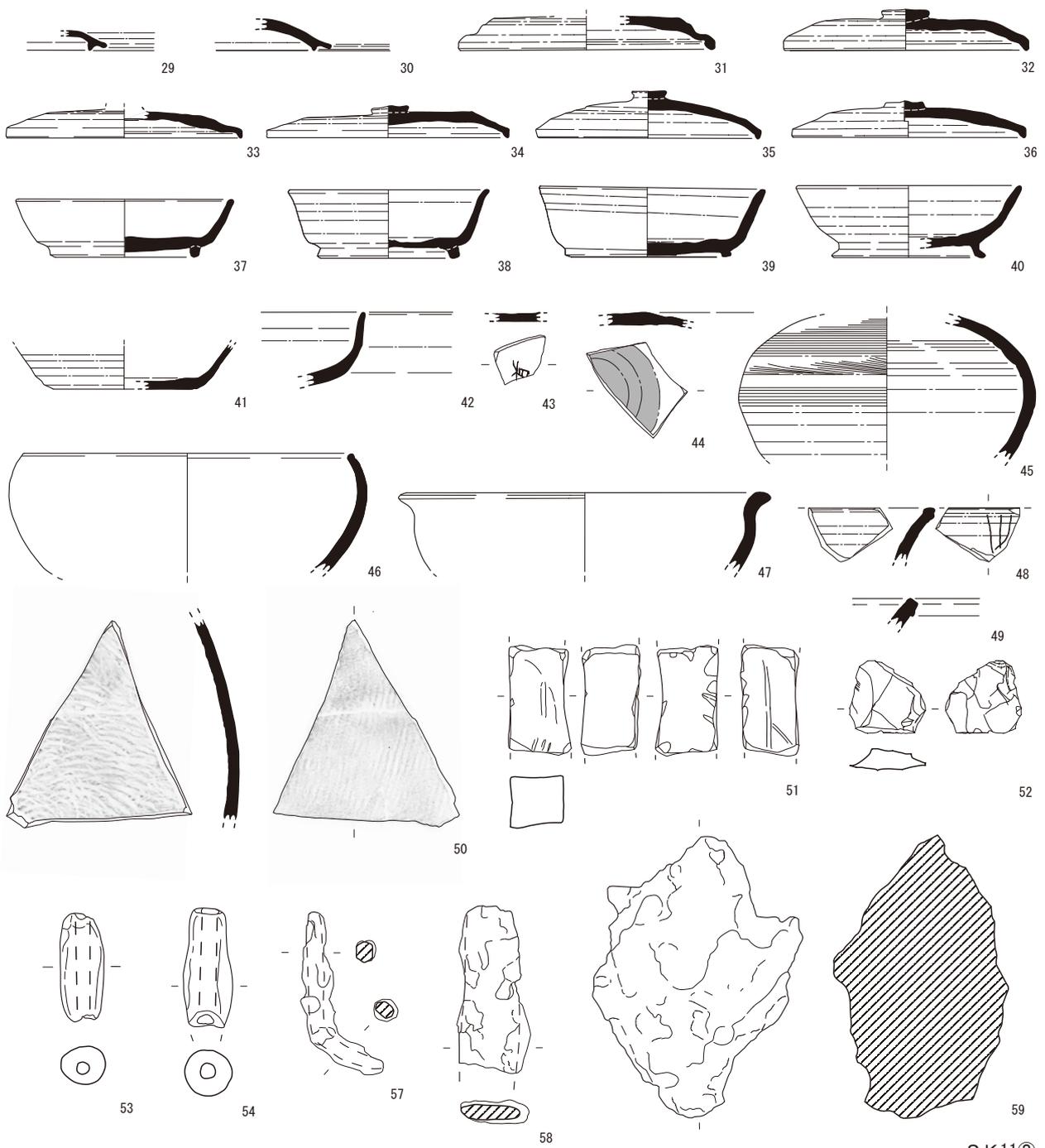
（3）出土遺物（第23～24・37～41図、第3～4表）

遺物の総量は、パンコンテナー6箱分である。このうち、SK11出土遺物が5箱を占める。古代の土師器と須恵器が大半を占め、弥生土器の細片や近世以降の陶磁器、土錘などの土製品、砥石や石核といった石製品、鉄滓などの鉄製品が含まれる。出土遺物の色調や法量などの詳細は、遺物観察表を参照頂きたい。以下、各遺物の特徴について簡単に補足する。

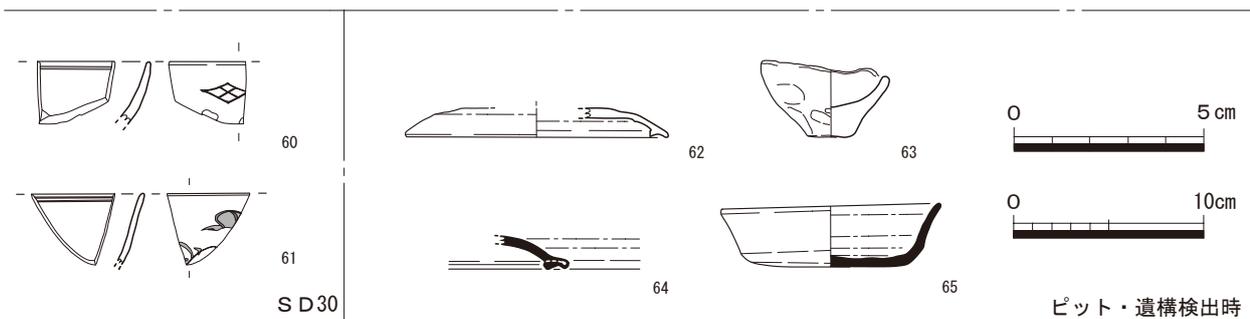
1はSK1出土の土師器把手で、唯一図示できた出土遺物である。2～59は、SK11出土遺物である。2～28は土師器である。2～3は坏蓋で、3は輪状つまみを有する。4～12は坏で、丸底（4～6）と平底（7～12）に二分される。調整が不明な個体もあるが、4と6は手持ちヘラケズリに



第23図 出土遺物実測図①（1/4）



SK11②



ピット・遺構検出時

第24図 出土遺物実測図②（1/2、1/4）

III. 汐入遺跡（第4次調査）

よる調整が見られる。12は底部外縁をヘラケズリで面取りしている。13～15は皿で、15は底部に刷毛目が見られる。16～17は高坏で、16は坏部内面の広範囲に油煙が付着する。18は下方を回転ヘラケズリで調整した鉢、19は甌の底部である。20～24は甕で、21・24は胴部が膨らむ。29～50は須恵器である。坏蓋は、口縁部にかえりを有する個体（29～30）と有しない個体（31～36）の両方が出土した。坏も、高台付坏（37～40）と高台の無い坏（41～42）で二分される。43は坏の底部片で、「首」または「道」の一部が焼成前に書かれている。44は坏蓋を転用した硯で、内面に硯面が見られる。45は長頸壺の胴部、46～47は鉢の口縁部で、46は鉄鉢形土器の可能性もある。48～50は甕で、48は外面に3条の線刻を有する。51は砂岩製の砥石で、溝状の使用痕跡が見られる。52は安山岩製の石核で、風化が進行しており、旧石器時代後期まで年代が遡る可能性がある。53～56は土製品で、53～54は土錘、55～56は焼成粘土塊で、藁の痕跡が残る。57～59は鉄製品で、57は六角形の断面、58は扁平な楕円形の断面を呈す。60～61は、SD30から出土した近世以降の染付碗である。62～64はピット出土遺物で、62は土師器坏蓋だが、焼成不良の須恵器の可能性もある。

第3表 出土遺物観察表1

遺物No.	出土遺構	材質	器種	法量 (cm)			色調		調整 (文様)			胎土量	備考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)	外面 (釉薬)	内面 (胎土)	外面	内面	底部・頂部			
1 第23-37図	SK1	土師器	把手	—	—	(4.8)	橙色	にぶい褐色	オサエナデ	オサエナデ	—	精良 (細砂粒、雲母)		201717 000001
2 第23-37図	SK11	土師器	坏蓋	—	2.1 (幅み径)	(1.5)	橙色	橙色	ヘラケズリ 回転ナデ	磨耗	磨耗	精良 (赤色粒子)		201717 000004
3 第23図	SK11	土師器	坏蓋	[17.0]	[6.5] (幅み径)	2.8	にぶい橙色		磨耗	磨耗	磨耗	精良 (金雲母)	磨耗著しい。	201717 000017
4 第23-37図	SK11	土師器	坏	13.3	11.8	3.4～3.7	にぶい黄橙色～黒色	にぶい黄褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	ヘラケズリ	精良 (微砂粒・赤色粒子)	丸底。外面に黒斑。	201717 000055
5 第23-37図	SK11	土師器	坏	15.3～15.3	12.5～12.8	3.1	にぶい橙色	橙色	磨耗	磨耗	磨耗	精良 (砂粒)	丸底。磨耗著しい。	201717 000020
6 第23-37図	SK11	土師器	坏	[14.0]	[8.4]	3.5	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ 工具ナデ	手持ちヘラケズリ	精良 (赤色粒子)	丸底。外面に黒斑、内面に門歯痕。	201717 000040
7 第23-37図	SK11	土師器	坏	9.8～10.0	7.0～7.2	3.1～3.5	橙色		磨耗	磨耗	磨耗	精良 (赤色粒子)	磨耗著しい。	201717 000044
8 第23図	SK11	土師器	坏	[19.2]	[14.2]	4.3	橙色		磨耗	回転ナデ 磨耗	磨耗	精良 (細砂粒)	磨耗著しい。	201717 000021
9 第23図	SK11	土師器	坏	14.2	12.2	3.8～4.3	橙色	にぶい橙色～褐色	磨耗	磨耗	磨耗	精良 (細砂粒、雲母)	磨耗著しい。	201717 000045
10 第23図	SK11	土師器	坏	[11.2]	8.0	2.8	橙色～浅黄褐色		回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り	精良 (赤色粒子)	磨耗著しい。	201717 000073
11 第23-37図	SK11	土師器	坏	11.8	8.1	2.6～2.8	橙色～浅黄褐色	橙色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラ切り	精良	外面にスス付着。	201717 000060
12 第23図	SK11	土師器	坏	—	[12.8]	(4.5)	橙色		回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	磨耗	精良 (微砂粒・赤色粒子)	上げ底気味。磨耗著しい。	201717 000053
13 第23図	SK11	土師器	皿	13.8	12.4	2.6	明赤褐色～褐色	黒褐色～褐色	回転ナデ 磨耗	回転ナデ 磨耗	磨耗	精良 (砂粒・赤色粒子)	外面磨耗。	201717 000046
14 第23図	SK11	土師器	皿	[16.1]	[10.9]	2.9	にぶい橙色～褐色		回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良 (金雲母)	磨耗著しい。	201717 000030
15 第23-38図	SK11	土師器	皿	[17.0]	[14.4]	2.7	にぶい橙色		回転ナデ ハケ目	回転ナデ ナデ	ヘラケズリ ハケ目	精良 (微砂粒・赤色粒子)		201717 000052
16 第23-37図	SK11	土師器	高坏	[22.4]	[11.8]	8.2	にぶい橙色～褐色	にぶい橙色～黒色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ 工具ナデ	回転ナデ 工具ナデ	精良 (砂粒)	坏部内面に油煙付着。	201717 000041
17 第23-38図	SK11	土師器	高坏	—	[12.0]	(5.9)	にぶい橙色	にぶい褐色～褐色	紋り痕 回転ナデ	紋り痕 工具・回転ナデ	—	精良 (微砂粒・赤色粒子)	脚部のみ。	201717 000036
18 第23-38図	SK11	土師器	鉢	[18.6]	—	(7.1)	浅黄褐色		回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	—	精良 (細砂粒)		201717 000066
19 第23-38図	SK11	土師器	甌	—	—	(0.9)	橙色		磨耗	ナデ	外面からの穿孔3ヶ所	精良 (微砂粒)		201717 000033
20 第23図	SK11	土師器	甕	[25.2]	—	(5.7)	橙色～浅黄褐色	褐色	回転ナデ 磨耗	回転ナデ 工具ナデ	—	精良 (砂粒・雲母・褐色粒子)	外面磨耗。	201717 000061
21 第23図	SK11	土師器	甕	[17.7]	—	(4.0)	褐色		磨耗	磨耗	—	精良 (細砂粒)	磨耗著しい。	201717 000031
22 第23図	SK11	土師器	甕	—	—	(11.7)	褐色		ハケ目 回転ナデ	ヘラケズリ 回転ナデ	—	砂粒、雲母を多く含む	磨耗著しい。	201717 000008
23 第23-38図	SK11	土師器	甕	[22.6]	—	(10.6)	にぶい褐色		ハケ目 磨耗	磨耗	—	砂粒を多く含む	内外面被熱により磨耗。	201717 000034
24 第23図	SK11	土師器	甕	[17.6]	—	(10.8)	褐色		磨耗	磨耗、赤変	—	砂粒、赤色粒子を多く含む	磨耗著しい。	201717 000038
25 第23-38図	SK11	土師器	把手	—	—	(9.8)	褐色		ハケ目 オサエ、ナデ	オサエ、ナデ	—	精良 (微砂粒・金雲母)		201717 000023

第4表 出土遺物観察表2

遺物 No.	出土遺構	材質	器種	法量 (cm)			色調		調整 (文様)			胎土 重量	備考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)	外面 (釉薬)	内面 (胎土)	外面	内面	底部・頂部			
26 第23・38図	SK11	土師器	把手	—	—	(8.2)	橙色		オサエ ナデ	オサエ ナデ	—	精良(微砂粒・雲 母・褐色粒子)	201717 000056	
27 第23図	SK11	土師器	把手	—	—	(6.8)	橙色		オサエ ナデ	磨耗	—	精良(細砂粒)	201717 000035	
28 第23図	SK11	土師器	把手	—	—	(2.3)	黄橙色	橙色	オサエ ナデ	剥離	—	精良(砂粒)	201717 000032	
29 第24・39図	SK11	須恵器	坏蓋	—	—	(1.2)	青灰色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良(微砂粒)	201717 000074	
30 第24・39図	SK11	須恵器	坏蓋	—	—	(2.0)	青灰色	青灰色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	—	精良(砂粒)	201717 000059	
31 第24・39図	SK11	須恵器	坏蓋	[16.2]	—	(2.1)	灰白色 ～灰色	灰白色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	—	精良	201717 000051	
32 第24・39図	SK11	須恵器	坏蓋	[15.5]	3.0 (幅み径)	2.6	灰黄色	灰白色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	精良(砂粒)	若干焼け歪み、内外面 磨耗。	201717 000037
33 第24図	SK11	須恵器	坏蓋	15.0	9.7 (頂部径)	(1.8)	淡黄色 ～灰白色	灰白色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	精良(細砂粒)	201717 000064	
34 第24・39図	SK11	須恵器	坏蓋	[15.3]	2.3 (幅み径)	2.0	灰色	灰色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り ナデ接合	精良(微砂粒)	若干焼け歪む。	201717 000014
35 第24・39図	SK11	須恵器	坏蓋	[14.0]	2.2 (幅み径)	3.0	灰色	灰色 ～黄灰色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	精良(細砂粒)	201717 000057	
36 第24・39図	SK11	須恵器	坏蓋	14.8	2.3 (幅み径)	2.3	灰白色		磨耗	磨耗	磨耗	精良(細砂粒)	磨耗著しい。	201717 000027
37 第24図	SK11	須恵器	坏	[13.8]	[9.1]	3.7	暗青灰色	灰色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り ナデ接合	精良(微砂粒)	若干焼け歪む。 外面に重ね焼痕跡。	201717 000007
38 第24・39図	SK11	須恵器	坏	12.6～ 13.2	9.0～ 9.4	4.3～ 4.4	灰色	灰色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り	精良(微砂粒)	若干焼け歪む。 外面に重ね焼痕跡。	201717 000015
39 第24・40図	SK11	須恵器	坏	14.2～ 14.4	10.4～ 10.6	4.3～ 4.6	灰白色		回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り ナデ接合	精良(細砂粒)	焼け歪む。	201717 000018
40 第24図	SK11	須恵器	坏	[14.2]	[9.7]	4.6	灰色		回転ナデ	回転ナデ ナデ	ナデ消し ナデ接合	精良(細砂粒)	若干焼け歪む。	201717 000029
41 第24図	SK11	須恵器	坏	—	[9.2]	(2.8)	灰白色		回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り ナデ消し	精良 (黒色粒子)	201717 000010	
42 第24図	SK11	須恵器	坏	—	—	(4.7)	灰褐色	にぶい 褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	—	精良 (黒色粒子)	201717 000005	
43 第24・40図	SK11	須恵器	坏	—	—	(0.6)	灰褐色		—	回転ナデ ナデ	ヘラ切り 線刻あり	精良	外面底部に線刻「首」 または「道」の一部。	201717 000076
44 第24・40図	SK11	須恵器	転用硯	—	—	(0.8)	灰白色 ～灰色	灰白色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	精良(細砂粒)	坏蓋を転用。	201717 000065
45 第24図	SK11	須恵器	壺	—	—	(9.2)	灰色		カキ目 ヘラケズリ	回転ナデ	—	精良(砂粒)	最大径:[18.8]cm	201717 000070
46 第24・40図	SK11	須恵器	鉢	[20.8]	—	(7.5)	浅黄橙色		磨耗	磨耗	—	精良(微砂粒)	最大径:[22.6]cm 鉄鉢形土器か。	201717 000011
47 第24図	SK11	須恵器	鉢	[21.8]	—	(5.0)	灰黄色	にぶい 黄色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良(細砂粒・ 赤色粒子)	201717 000025	
48 第24・40図	SK11	須恵器	甕	—	—	(3.4)	橙色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良(細砂粒・ 黒色粒子)	外面に線刻3条あり。	201717 000026
49 第24図	SK11	須恵器	甕	—	—	(1.9)	灰色～ 暗灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良(細砂粒)	201717 000012	
50 第24図	SK11	須恵器	甕	—	—	(13.1)	灰白色	黄灰色	平行文叩き	同心円文 叩き	—	精良(細砂粒・ 黒色粒子)	201717 000043	
51 第24・41図	SK11	石製品	砥石	(7.1)	(3.8)	(3.6)	にぶい黄橙色		砥面	砥面	—	(162.0)g	砂岩製。	201717 000006
52 第24・40図	SK11	石製品	石核	4.8	4.6	1.4	灰色		剥離	剥離	—	34.25g	安山岩製。	201717 000049
53 第24・41図	SK11	土製品	土錘	3.5	1.3～1.4		にぶい黄橙色～黒褐色		ナデ 磨耗	磨耗	—	(5.15)g	外面磨耗。	201717 000078
54 第24・41図	SK11	土製品	土錘	(3.8)	1.5～1.6		にぶい黄橙色～黒褐色		ナデ 磨耗	磨耗	—	(6.30)g	外面磨耗。	201717 000077
55 第41図	SK11	土製品	焼成粘土塊	8.4	7.7	3.4	明赤褐色		藁・ 竹管痕跡	—	—	微砂粒を多く含む 114.95g	壁材の破片か	201717 000067
56 第41図	SK11	土製品	焼成粘土塊	8.6	6.8	5.1	橙色		藁痕跡	—	—	微砂粒、赤色粒子 123.65g	壁材の破片か	201717 000072
57 第24・41図	SK11	鉄製品	鉄片	5.2	1.0		暗褐色		鉄錆	—	—	7.75g	断面六角形。	201717 000087
58 第24・41図	SK11	鉄製品	鉄片	(5.3)	2.2	0.8	暗褐色		鉄錆	—	—	(10.50)g	断面扁平な楕円形。	201717 000088
59 第24・41図	SK11	鉄製品	鉄滓	9.0	6.7	5.4	暗褐色		鉄錆	—	—	318g	焼成粘土塊が伴う。	201717 000089
60 第24・41図	SD30	磁器	碗	—	—	(3.3)	染付 透明釉	灰白色	四菱文	圏線	—	精良 (黒色粒子)	201717 000082	
61 第24・41図	SD30	磁器	碗	—	—	(3.8)	染付 透明釉	白色	草花文	二重圏線	—	精良	201717 000083	
62 第24・41図	SP5	土師器	坏蓋	[13.7]	7.0 (頂部径)	(1.6)	黄橙色	橙色	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	ナデ	精良(細砂粒)	外面磨耗。	201717 000002
63 第24・41図	SP20	土師器	小鉢	6.7	2.4	3.2～ 4.1	にぶい 黄橙色	にぶい 橙色	オサエ ナデ	ナデ	ナデ	精良 (赤色粒子)	外面磨耗。	201717 000080
64 第24図	SP27	須恵器	坏蓋	—	—	(1.8)	黄灰色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良(細砂粒)	201717 000081	
65 第24・41図	遺構 検出時	須恵器	坏	11.5	8.1	3.1～ 3.4	灰色	灰色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り ナデ消し	精良(細砂粒)	若干焼け歪む。 外面に重ね焼痕跡。	201717 000086

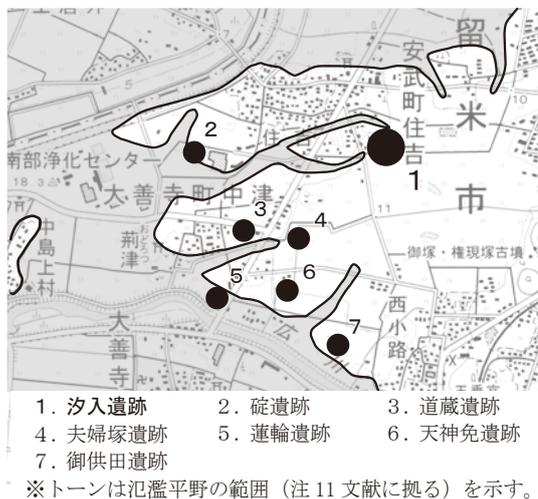
## 4. 総括

隣接する第2次調査A区で竪穴住居や木棺墓が見つかった弥生時代の遺構は、今回の調査では検出していない。遺物も、弥生土器の細片や黒曜石・安山岩の石核、剥片が古代の遺構に混入して出土したのみである。

古代の遺構は、SA25とSK1、SK11が挙げられる。SA25とSK1は出土遺物が少ない上にほとんどが細片のため、詳細な年代は明らかにできない。SK11出土遺物の年代は、丸底と平底の土師器坏が混在する点、須恵器の坏蓋にかえりを有する個体と無い個体が混在する点、土師器高坏や須恵器鉢の形状などから、7世紀後半から8世紀中頃に収まる（注3）。この時期は、第2～3次調査のI期からII期に当たり、前者は第4次調査地点から南約210mに位置する第2次調査B区の大形建物を中心に、管理・収蔵施設と居住域が営まれる段階、後者はその機能が夫婦塚遺跡に移行する段階と想定されている（注4）。第4次調査地点周辺の第2次調査A区と第3次調査D～G区では、7世紀後葉から9世紀前半の掘立柱建物や溝、井戸、土坑が検出されている。特に、第3次調査E区では第II期に廃棄土坑が増加しており、これらは焼土や炭化物が埋土に含む。SK11も埋土に焼土や炭化物を含み、壁材とみられる焼成粘土塊や炭化物が大量に出土したことから、第3次調査E区の土坑群と一連の土坑と考えられる。これらの土坑の性格だが、焼土や炭化物を埋土に含む、鞆羽口と鉄滓が出土したことから、製鉄に関連する施設の存在を想定できる。ただし、既に指摘されているように鞆羽口と鉄滓の出土点数は極めて少なく、未だ確証に乏しいのが現状である。

また、SK11からは土錘も出土した。古代の土錘は第1～3次調査（注5）でも出土したほか、碇遺跡（注6）や道蔵遺跡（注7）、夫婦塚遺跡、蓮輪遺跡（注8）、天神免遺跡（注9）、御供田遺跡（注10）でも出土した。これらの遺跡では中世の遺構からも土錘が出土しており、しかも氾濫平野に面する台地の縁に位置する（第26図）（注11）。筑後川や広川に面した集落における、漁労活動を示す遺物として注目できる。

近世の溝SD30は、調査区を横切る段落ちに沿い、調査地点北側の畔の延長上に位置することから、水田の畦に付属する排水路と考えられる。宅地造成前の住人によると、調査地点に以前建っていた住宅は戦後の建物であるとのことなので、それよりも前に機能していたと考えられる。



第25図 土錘出土遺跡分布図（1/25,000）

（西）

### 【注】

- (1) 久留米市教育委員会『汐入遺跡 一第1分冊 第2次発掘調査編一』久留米市文化財調査報告書第393集 平成30年  
 (2) 久留米市安武校区公民館広報部『安武町の史跡』 昭和63年

(3) 古代の土器の年代は、以下の文献を参考にした。

松村一良「筑後国府跡の調査」（財）古代学協会『古代文化』第35巻第7号 昭和58年

大庭孝夫「堂畑遺跡周辺における7世紀後半～8世紀末の土師器の変遷」

福岡県教育委員会『堂畑遺跡Ⅲ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第23集 平成17年

大野城市教育委員会『牛頸窯跡群 一総括報告書Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第77集 平成20年

(4) 久留米市教育委員会『汐入遺跡 一第2分冊 第3次発掘調査編一』久留米市文化財調査報告書第393集 平成30年

(5) 久留米市教育委員会『汐入遺跡』久留米市文化財調査報告書第78集 平成5年

(6) 久留米市教育委員会『礎遺跡』久留米市文化財調査報告書第190集 平成15年

久留米市教育委員会『礎遺跡 一第5次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第376集 平成29年

(7) 久留米市教育委員会『道蔵遺跡』久留米市文化財調査報告書第68集 平成3年

久留米市教育委員会『大善寺北部地区遺跡群Ⅴ』久留米市文化財調査報告書第112集 平成8年

久留米市教育委員会『筑後国三潞郡衙跡Ⅱ 道蔵遺跡第15・16次調査』久留米市文化財調査報告書第212集 平成17年

久留米市教育委員会『筑後国三潞郡衙跡Ⅳ 道蔵遺跡第18次調査報告』久留米市文化財調査報告書第270集 平成20年

(8) 久留米市教育委員会『大善寺北部地区遺跡群Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第92集 平成6年

(9) 久留米市教育委員会『天神免遺跡 一第1・2・3次調査一』久留米市文化財調査報告書第402集 平成30年

(10) 久留米市教育委員会『大善寺北部地区遺跡群Ⅵ』久留米市文化財調査報告書第129集 平成9年

(11) 久留米市教育委員会『大善寺北部地区遺跡群Ⅳ』久留米市文化財調査報告書第102集 平成7年



第26図 表土剥ぎ風景（北西から）



第27図 調査風景（東から）



第28図 調査区全景（西上空から）

Ⅲ. 汐入遺跡（第4次調査）



第29図 SA25完掘状況（西上空から）



第30図 SA25P 1 土層（東から）



第31図 SA25P 2 土層（東から）



第32図 SA25P 3 土層（東から）



第33図 SK 1 完掘状況（東から）



第34図 SK11土層完掘状況（北西上空から）



第35図 SD30完掘状況（南西から）

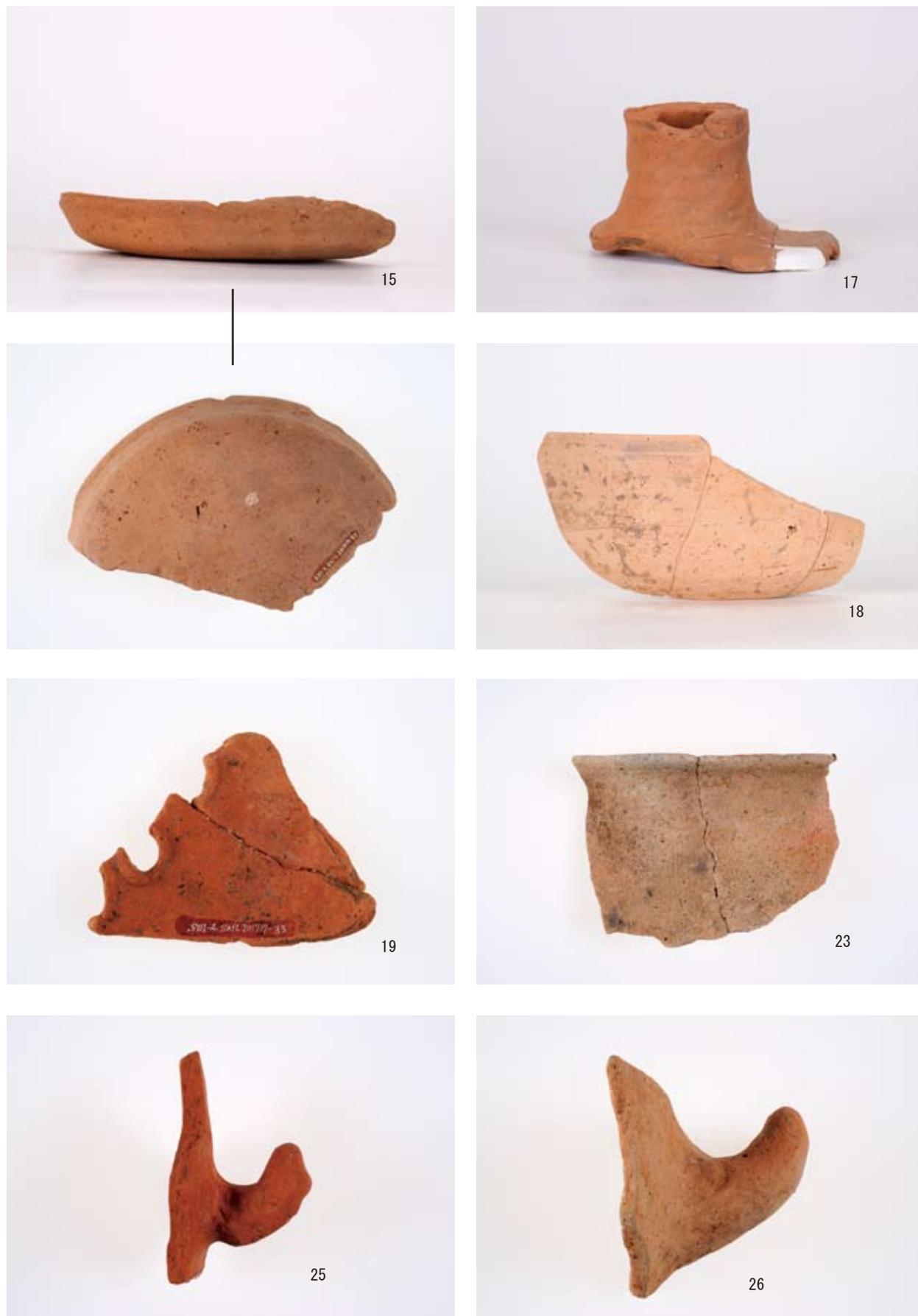


第36図 SD30土層（南西から）



第37図 出土遺物写真①

III. 汐入遺跡（第4次調査）



第38図 出土遺物写真②

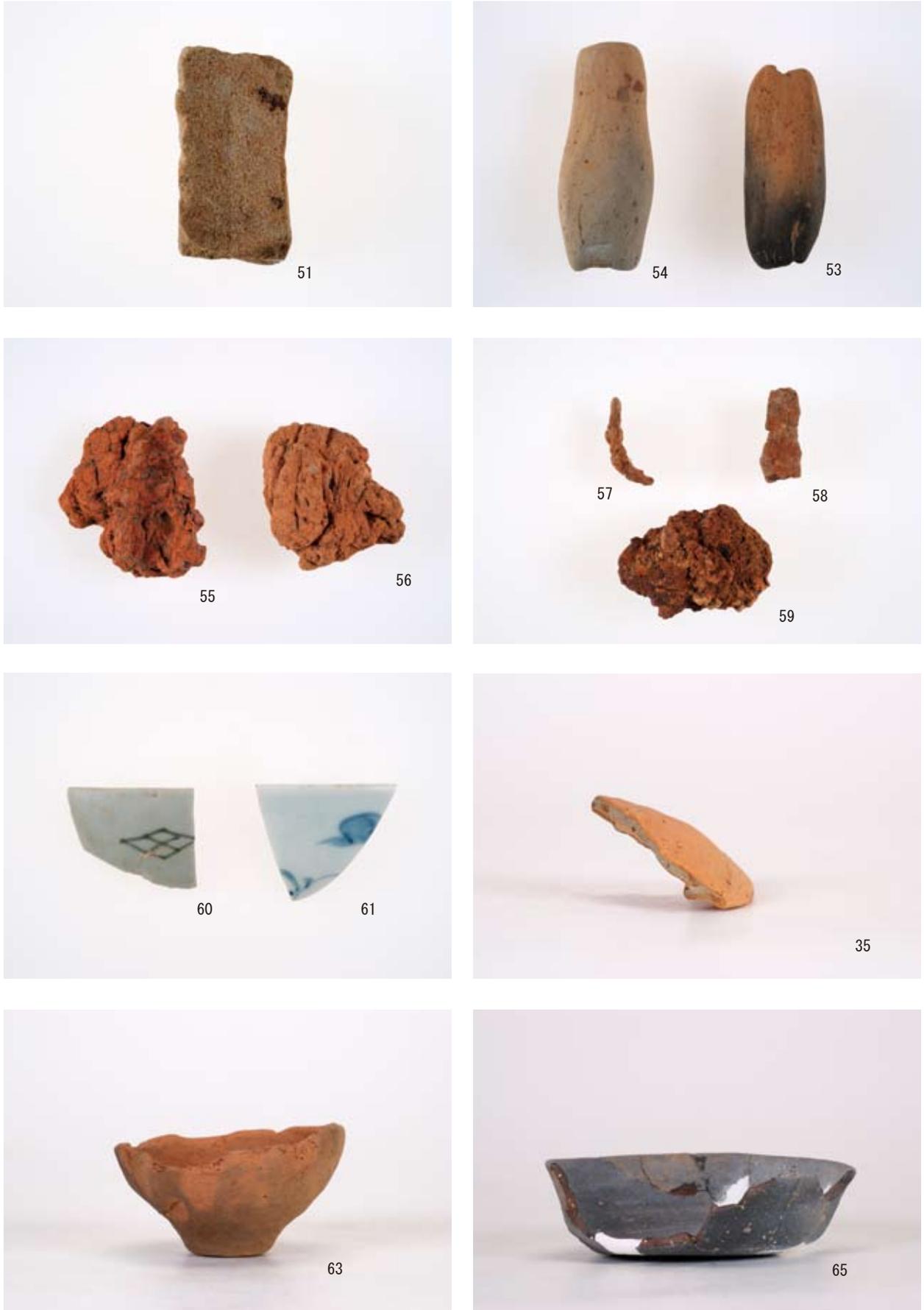


第39図 出土遺物写真③

III. 汐入遺跡（第4次調査）



第40図 出土遺物写真④



第41図 出土遺物写真⑤

## IV. 筑後国府跡（第290次調査）

### 1. 調査に至る経緯

本調査は水道管改良工事に伴う発掘調査である。平成29年8月1日、久留米市上下水道部上水道整備課（以下、上水道整備課）より久留米市合川町字柿ノ内における「埋蔵文化財包蔵の有無」についての照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡の範囲内に含まれており、Ⅱ期政庁に付随する国司館地域（国史跡）に隣接している。しかしながら、掘削幅が60cmと狭く、発掘調査を実施することが、困難であったため、工事立会を実施することとした。ただし、工事予定地に指定地の隣接地が含まれるため上水道整備課と調整を行い、指定地隣接部分については、工事立会時に上面確認および、測量を平行して行い対応することとした。現地での調査は同年9月4日から開始し、9月21日に完了した。調査面積は約158㎡である。

### 2. 位置と環境

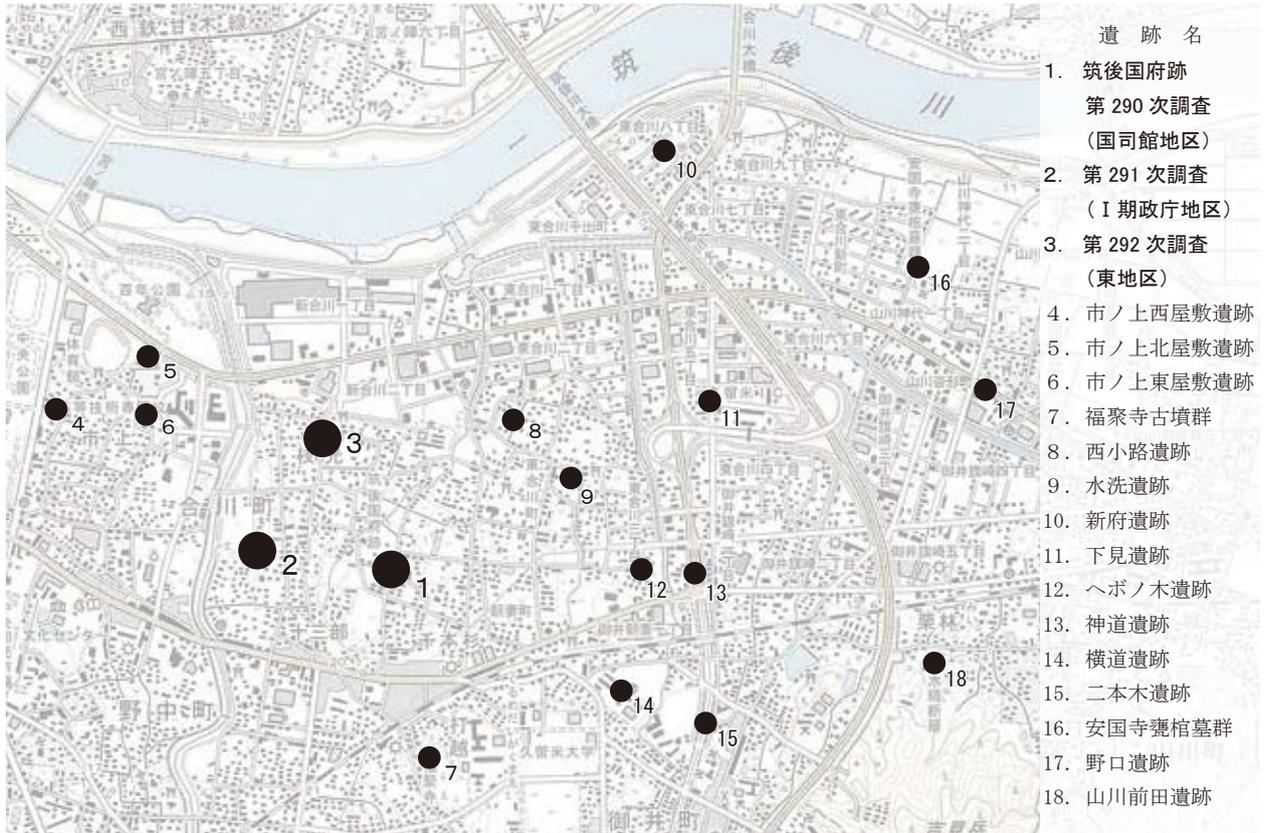
久留米市は筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中央部、低位段丘上に位置する。筑紫平野の南側には高良山が高くそびえる。ここから北西に派生する低位段丘上に筑後国府跡は位置し、東西1.0km、南北0.7kmの範囲に及ぶ。台地上の南端には水縄断層帯が東西に伸び、断層崖下にはいくつもの湧水点が見られる。台地の西側は高良川、東側は井田川が流れ、北側の筑後川の氾濫原、南側の断層崖とともに国府域の四方を囲んでいる。

筑後国府跡付近では旧石器時代から近世まで数多くの遺跡が確認されている。旧石器時代には、二本木遺跡や野口遺跡でナイフ形石器や台形型石器などが、縄文時代の以降の遺構埋土や包含層から出土している。

縄文時代は、野口遺跡で前期～後期の竪穴状遺構や土坑などが数多く確認されており、前～晩期の縄文土器や石器も非常に多く出土している。そのほか、横道遺跡や水洗遺跡、へボノ木遺跡、上遺跡、西小路遺跡、筑後国府跡、神道遺跡、新府遺跡からも遺構や遺物が確認されている。

弥生時代には、安国寺甕棺墓群（国史跡）で中期～後期の甕棺墓63基や土坑墓4基、祭祀土坑12基などが確認されている。市ノ上北屋敷遺跡では甕棺墓や竪穴状遺構、環状土坑列が確認され、市ノ上西屋敷遺跡では甕棺墓・石棺墓が検出され、石棺墓からは半裁された内行花文鏡が出土した。筑後国府跡でも古宮地区（古宮遺跡）では国府跡調査に伴い、住居群を二分する溝状遺構や方形の竪穴住居や掘立柱建物、甕棺墓が確認されている。そのほか、へボノ木遺跡や二本木遺跡、新府遺跡、山川前田遺跡などでも多く資料が得られている。

高良山から派生した丘陵上に位置する福聚寺古墳群では、円墳に加え方墳2基が確認されている。



第42図 調査地点と周辺の遺跡分布図(1/25,000)



第43図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)

奈良・平安時代の遺構や遺物は、筑後国府跡を中心として、へボノ木遺跡や二本木遺跡、横道遺跡、神道遺跡、山川前田遺跡など多くの遺跡で確認されている。

東アジアが政治的緊張状態にあった7世紀中頃に軍事的性格が強い前身官衙が造営される。その後、筑後国が成立した7世紀末～8世紀前半にかけて、前身官衙域を踏襲して、古宮地区に南北約180mの築地塀で区画された官衙政庁（Ⅰ期政庁）が営まれる。8世紀中ごろには、Ⅰ期政庁から東に約200m地点に、南北約80m・東西約70mの範囲に築地塀を伴う方形区画が造成され、Ⅱ期政庁が営まれる。Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約200m付近では、国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に火災により焼失したと推定され、さらに東へ約600m付近にⅢ期政庁を再建している。Ⅲ期政庁は南北約130m・東西約150mの大区画をなし、幅約4mの大溝で囲繞されている。11世紀末にⅢ期政庁が廃絶すると、南東300mの地点にⅣ期政庁が移転される。『高良記』における「今ノ府」と思われる政庁は12世紀後半まで存続したようである。

### 3. 調査の記録

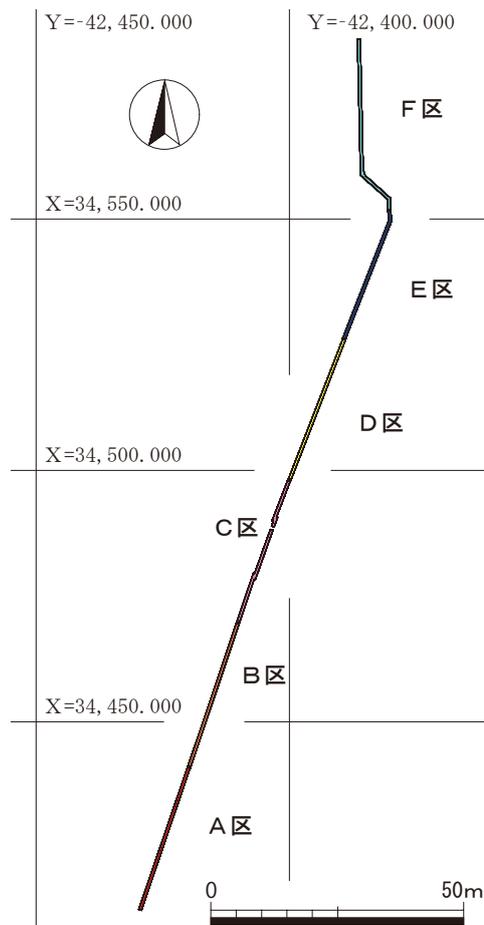
#### （1）調査の経過

平成29年9月4日、対象地における水道管改良工事に先立つ掘削が開始された。掘削工事の進捗上、調査日ごとに掘削と埋め戻しを行う必要があったため、遺構の検出を実施し、遺構図の作成や遺構写真の撮影を行い、重機による埋め戻しを行った。工事立会は計6日間実施し、同月21日に全ての現地作業を終了した。

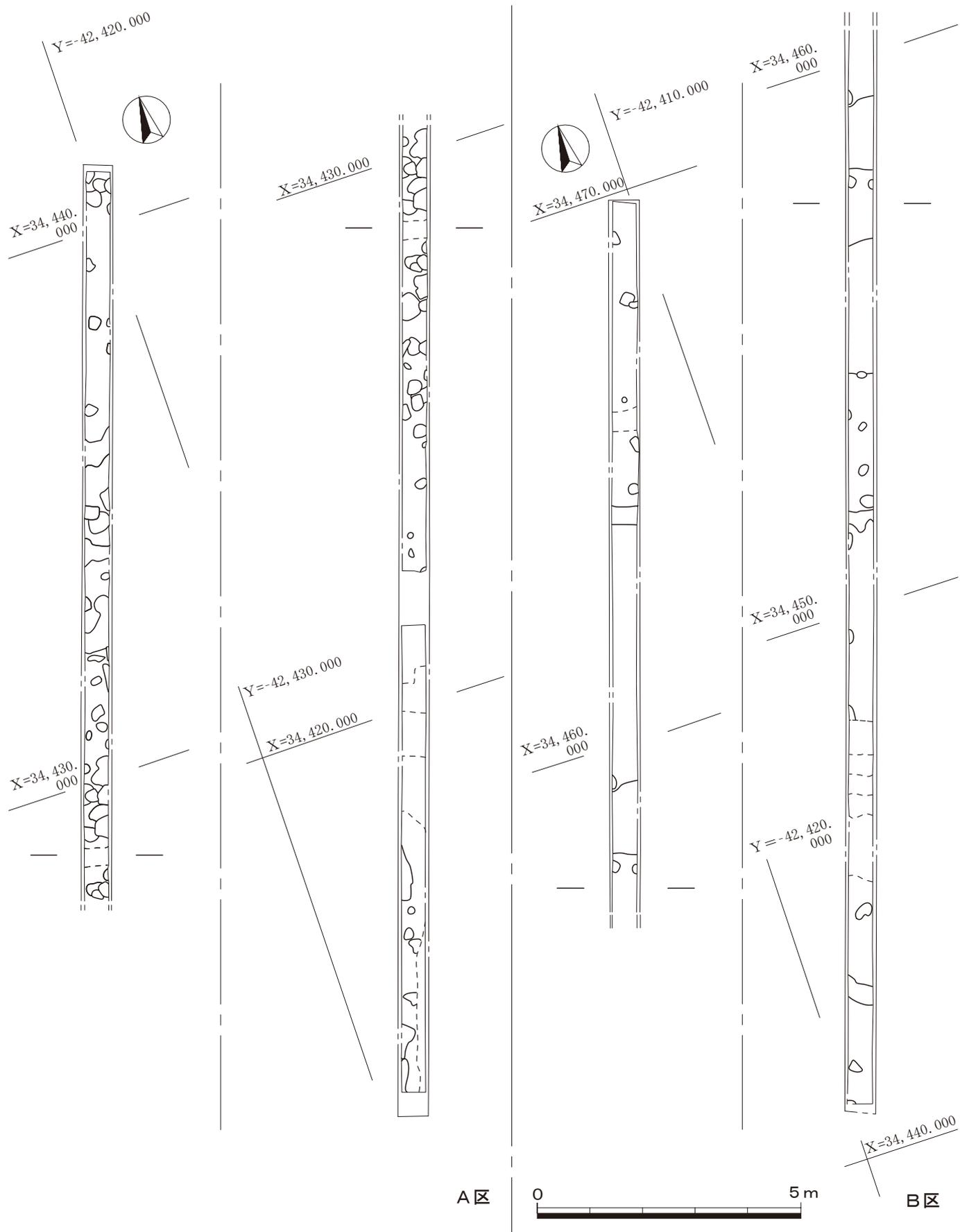
なお、遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、その記録は株式会社CUBIC社製の「遺構くんcubic」において編集・保存している。また、遺構の記録写真は、モノクローム・カラーリバーサルともに6×7判で撮影した。

#### （2）遺構の概要

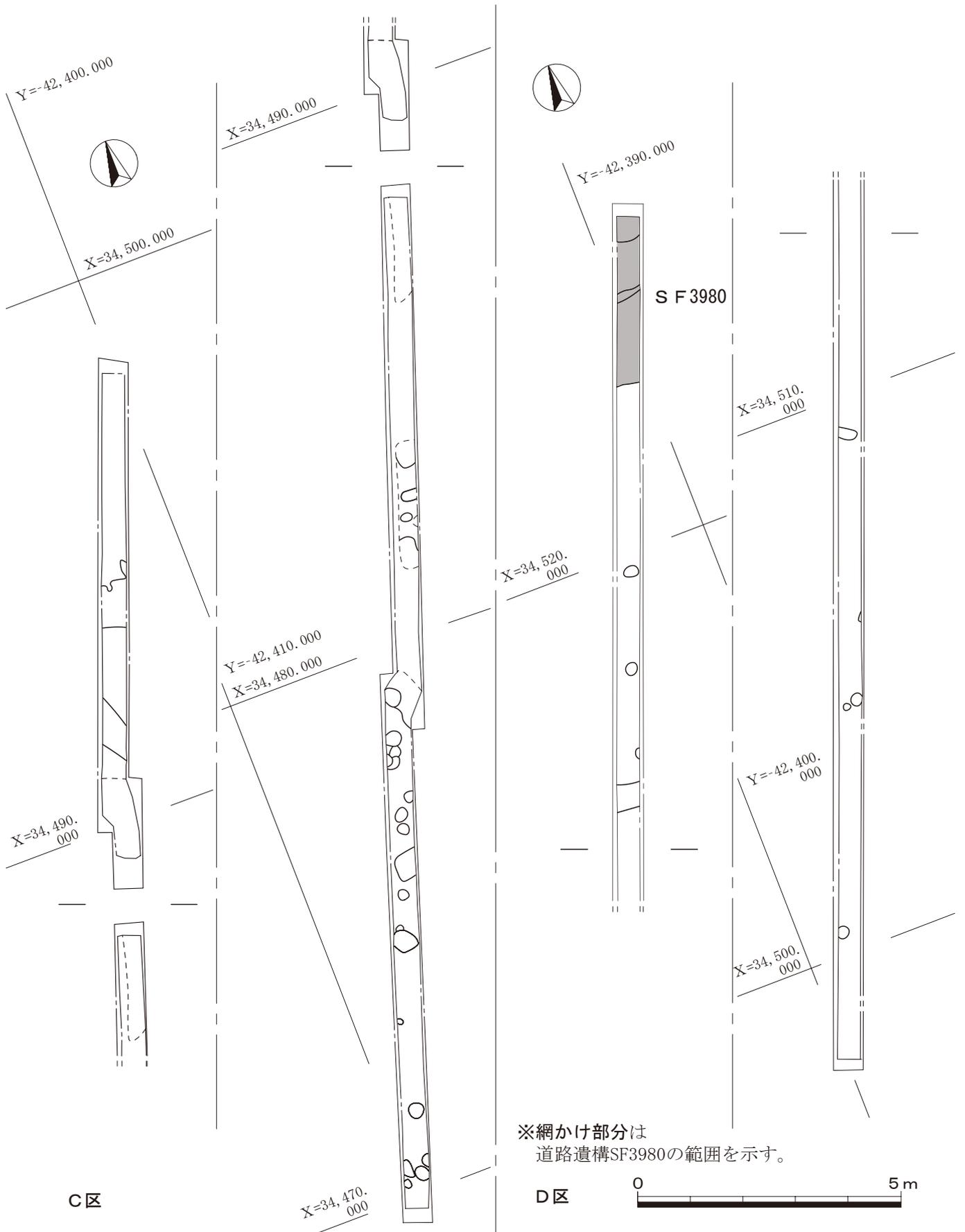
調査は、南北約180m、幅60cmの調査区で、遺構の上面確認を行った。掘削工事の進捗上、掘削と埋め戻しを1日で行う必要があったため、日ごとに南から北にA～F区と設定した。地表から約0.8mで検出面に至る。遺構は道路遺構1条、土坑、ピット多数であるが、今回は上面確認を目的とし、掘り下げを行っていないため、出土遺物は無い。以下、検出遺構について報告する。



第44図 調査区遺構配置図（1/1,500）



第45図 A・B区遺構配置図 (1/100)



第46図 C・D区遺構配置図 (1/100)

## 道路遺構

### S F 3980（第46・47図）

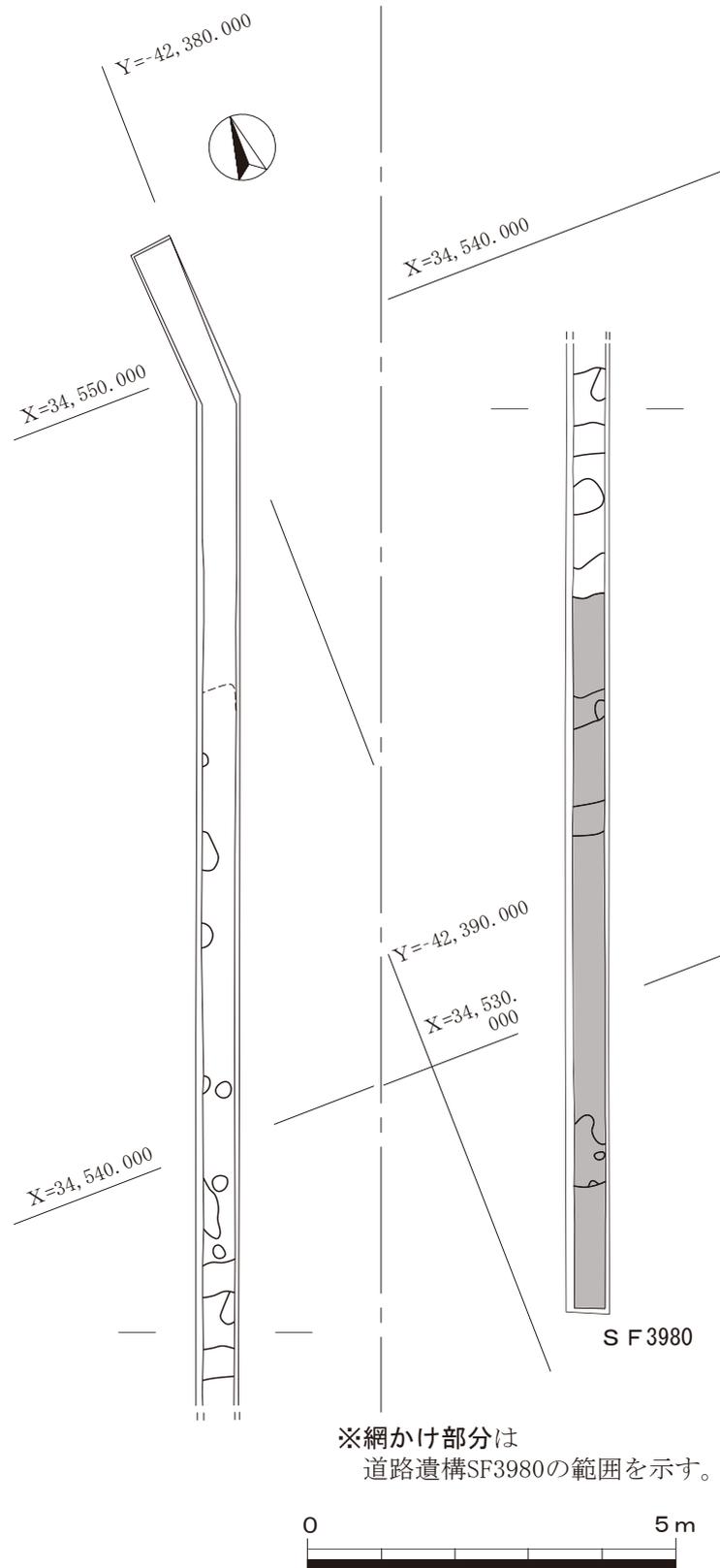
D区北部およびE区で検出した道路遺構である。調査区東側において実施された第96・211・217次調査および西側の第32・55次調査でも検出されている。今回の調査では南北約8m分検出した。黄褐色土が広がる面において、黒褐色の斑が確認できる部分や砂利など確認できる部分があり、自然堆積によるものではないと考えられる。掘り下げを行っていないため、検出面以下の構造については不明であるが、周辺における調査をもとに検討すると、S F 3980の延長にあたと推定される。

## 4. 総括

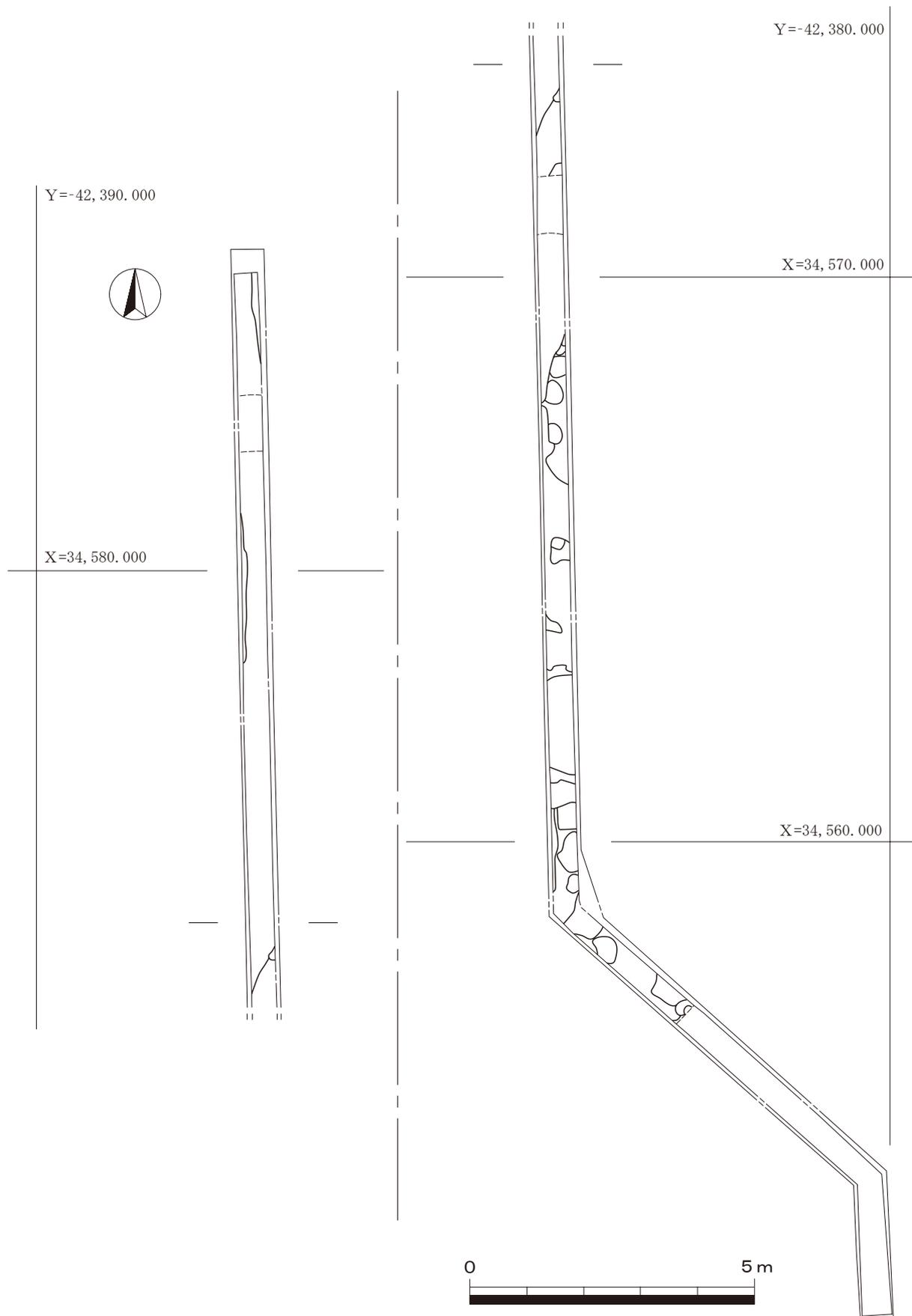
今回の調査は、水道管改良工事に先立つ確認調査であった。調査地は久留米市合川町字柿ノ内に位置し、筑後国府跡Ⅱ期政庁に伴う国司館（国史跡）の東側に隣接している。

本調査区は幅約0.6m、全長約180mであった。調査では調査区全体でピットや土坑を確認できた。また、調査区の一部は国府域を東西に縦断する道路遺構S F 3980の想定ルート上にあっていた。掘り下げを行っていないため、詳細な構造の検討や遺物の確認はできていないが、調査の結果、想定通りに包含層直下においてS F 3980を確認することができた。

（大隈）



第47図 E区遺構配置図（1/100）



第48図 F区遺構配置図 (1/100)



第49図 A区南部検出状況（南から）



第50図 A区北部検出状況（北から）



第51図 B区南部検出状況（南から）



第52図 B区北部検出状況（北から）



第53図 C区南部検出状況（南から）



第54図 C区中央部検出状況（北から）



第55図 C区北部検出状況（南から）



第56図 C区土層（西から）



第57図 D区南部検出状況（南から）



第58図 D区北部検出状況（北から）



第59図 D区土層断面（東から）



第60図 E区南部検出状況（南から）



第61図 E区検出状況（北から）



第62図 E区検出状況（北から）



第63図 F区南部検出状況（南から）



第64図 F区北部検出状況（北から）

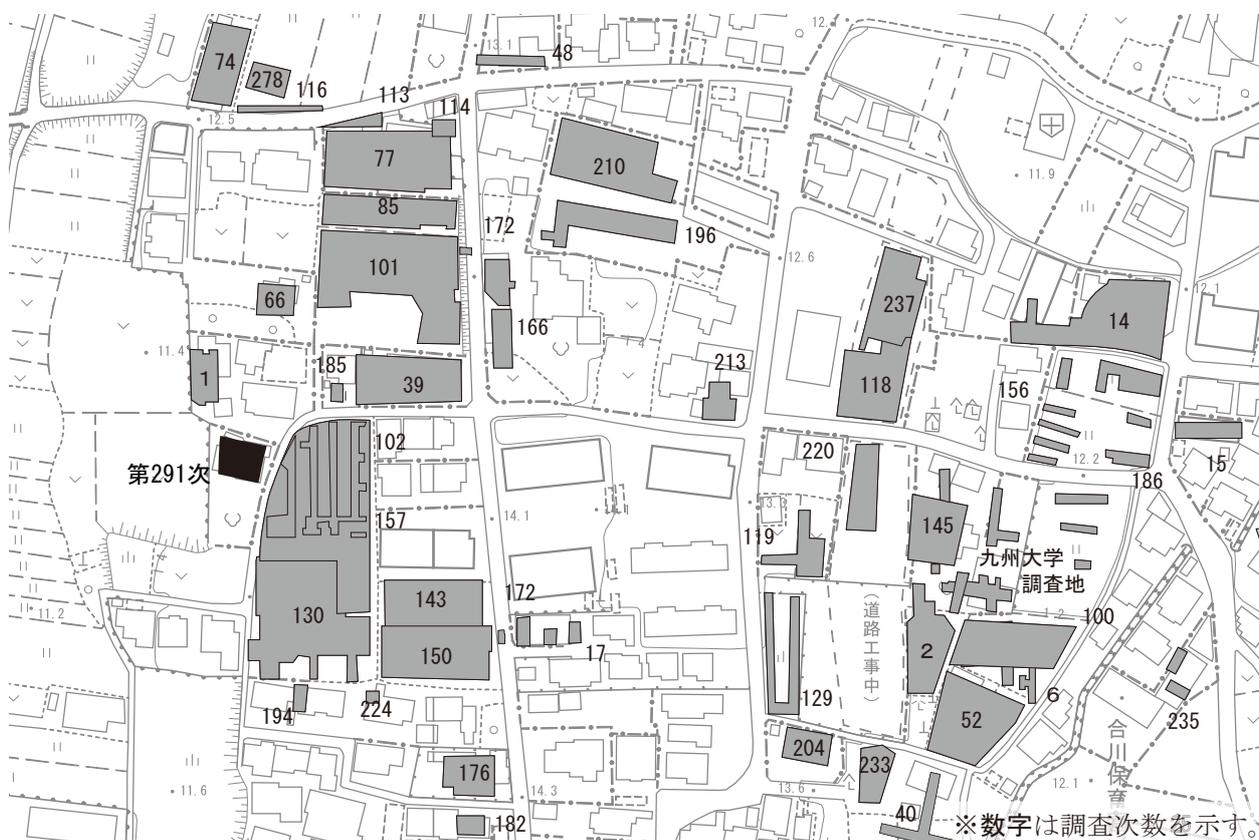
## V. 筑後国府跡（第291次調査）

### 1. 調査に至る経緯

本調査は専用住宅建設に伴う確認調査である。平成29年11月10日、土地所有者より久留米市合川町1369-2における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡の範囲内に含まれ、国史跡に指定されているI期政庁の東側に隣接する。東側隣接地では、平成7・10年度に第102・157次調査で重要遺跡確認調査を行い、国府前身官衙及びI期政庁に伴う掘立柱建物や溝、古墳時代や中世の遺構も多く確認されている。今回、開発予定の基礎構造上、遺構の保存は可能であったが、対象地が史跡対象地の隣接地であることから、代理人と協議の上で敷地内全体を対象に発掘調査を実施する運びとなった。現地での調査は翌年2月5日から開始し、3月12日に完了した。対象面積は350㎡で、そのうち調査面積は183㎡である。

### 2. 位置と環境

第291次調査地点は、第290次調査地点の東へ470mのところのところに位置する。地理的歴史的環境については、第IV章を参照されたい。



第65図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2, 500)

### 3. 調査の記録

#### (1) 調査の経過

平成30年2月5日、敷地内全体に調査区を設定し、重機によって表土剥ぎを実施した。その後、遺構の検出を実施し、一部掘り下げや遺構図の作成、遺構写真の撮影を行った。同月24日に空撮で全体写真を撮影し、同月26日に重機による埋め戻し及び表土剥ぎを行い、調査区を反転した。遺構の検出を再度行い、遺構図の作成や遺構写真の撮影を実施した。3月7日に気球で全体写真を撮影し、同月12日に重機による埋め戻しと発掘器材の撤収を行い、全ての現地作業を終了した。



第66図 遺構配置図 (1/100)

## （2）検出遺構

今回の調査では、総柱建物2棟、竪穴建物4棟、土坑、ピット多数を検出した。今回は上面確認を主体とした調査であり、遺構の掘り下げは必要最低限に留めている。以下、遺構の詳細を述べる。

### 総柱建物

#### SB1（第66・67・68・75～78・80図）

調査区の北東部で検出した東西棟の総柱建物である。計画方位は真北（座標北）である。桁行は3間（7.8m）、梁行2間（5.4m）の規模を有し、床面積は42.12㎡である。桁行・梁行の柱間の距離は、南側柱列で西から2.17m+2.15m+2.15m、西側柱列は北から2.2+1.86mを測り、バラつきがみられる。掘方の平面形は直径1.1～1.3mの楕円形あるいは隅丸方形を呈し、全ての柱穴から柱痕が確認されている。柱痕の径は35～40cmである。北側の一部は攪乱で削平を受けており、柱穴の断面確認を目的に攪乱部分を一部掘り下げた。掘方の深さは共に0.6mである。ただし、P3の柱痕部分に関してはさらに0.2m深い。また、掘方の埋土は黒褐色土層と黄褐色粘質土ブロックが混ざる層が確認できる。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、鉄斧が出土しているが、大半が細片である。

#### SB5（第66・79図）

調査区の南東部端で検出した総柱建物である。調査区外に展開するため、検出できたのは東西1間分のみである。掘方は円形あるいは隅丸方形の平面プランを呈する。柱痕が確認されている柱穴は1箇所のみで、柱痕の径は35cmである。遺物は出土していない。

### 竪穴建物

#### SI8（第66図）

調査区の東側で検出された隅丸長方形を呈する竪穴建物である。規模は長辺5.0m・短辺3.1mである。SI9・10に先行し、SB1に後出する。今回は掘り下げを最低限に留めているため、竪穴建物からの出土遺物はない。

#### SI9（第66図）

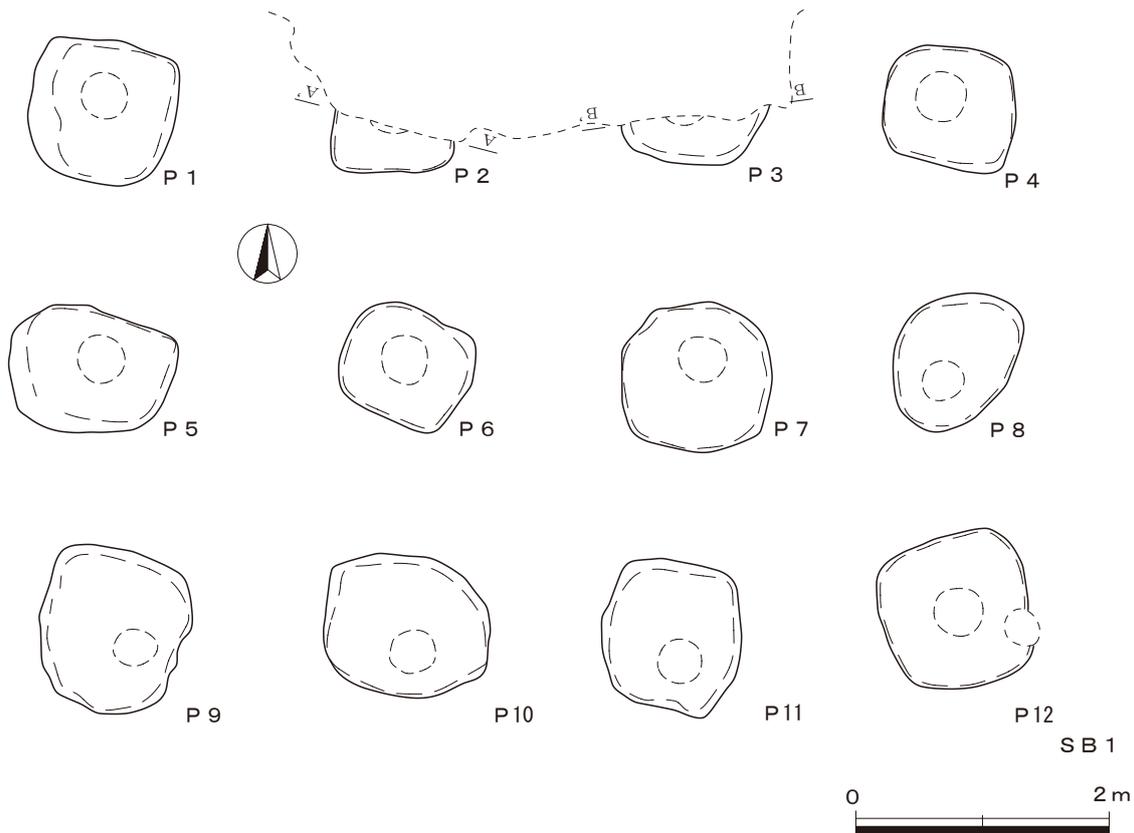
調査区の東側で検出された竪穴建物である。遺構は調査区外に延長しており、平面形は隅丸長方形を呈すると想定される。長辺6.9m・短辺3.5mを測る。SB1・SI8に先行し、SI10が後出する。SI8同様に、遺物は取り上げていない。

#### SI10（第66図）

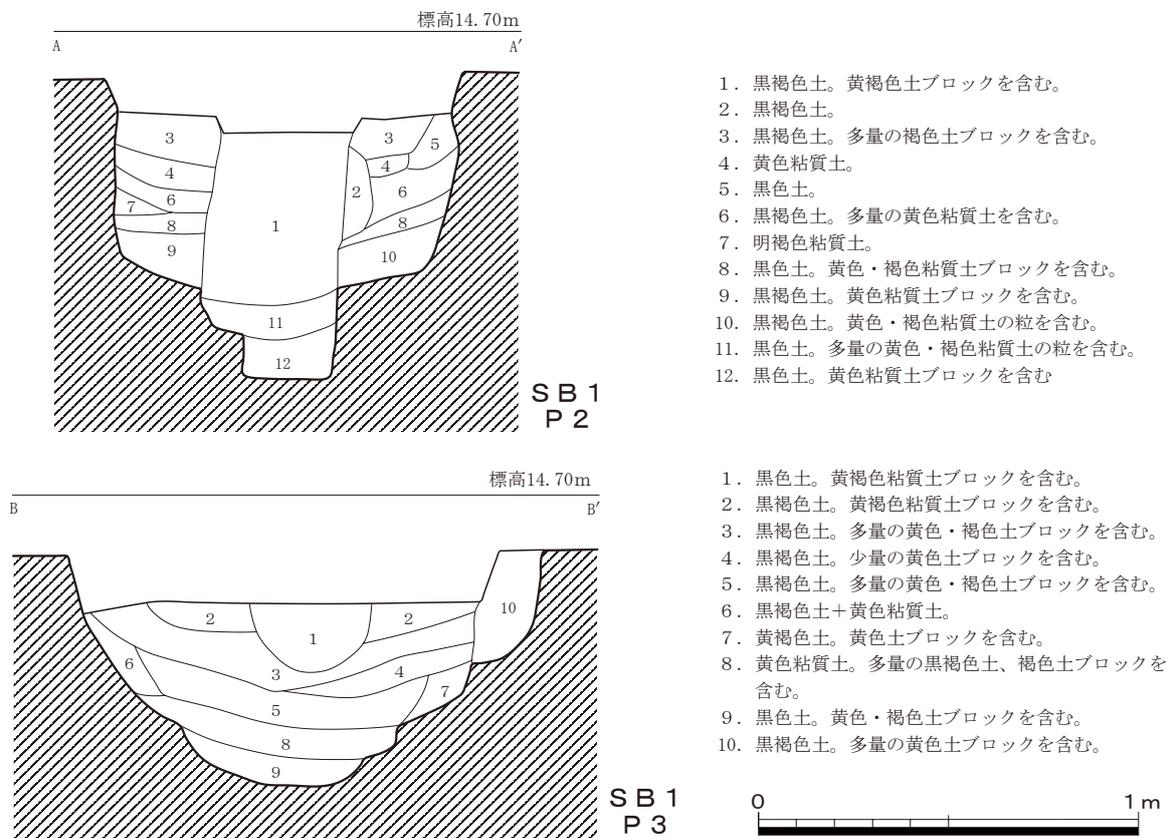
調査区の東側で検出された竪穴住居である。遺構の大半が他の遺構と重複し、平面形は不明であるが、方形あるいは長方形を呈すると想定される。残存部は長辺4.2m・短辺2.8mの規模を呈する。SI11に先行し、SI8・9に後出する。掘り下げを行っておらず、遺物は取り上げていない。

#### SI11（第66図）

調査区の東側で検出された竪穴住居である。遺構の大半が他の遺構と重複し、平面形は不明である。残存部の規模は、長辺3.5m・短辺1.1mである。SB1・SI8・9と重複関係にあり、SB1に先行し、SI8・9に後出する。遺物は確認されていない。



第67図 SB 1 実測図 (1/600)

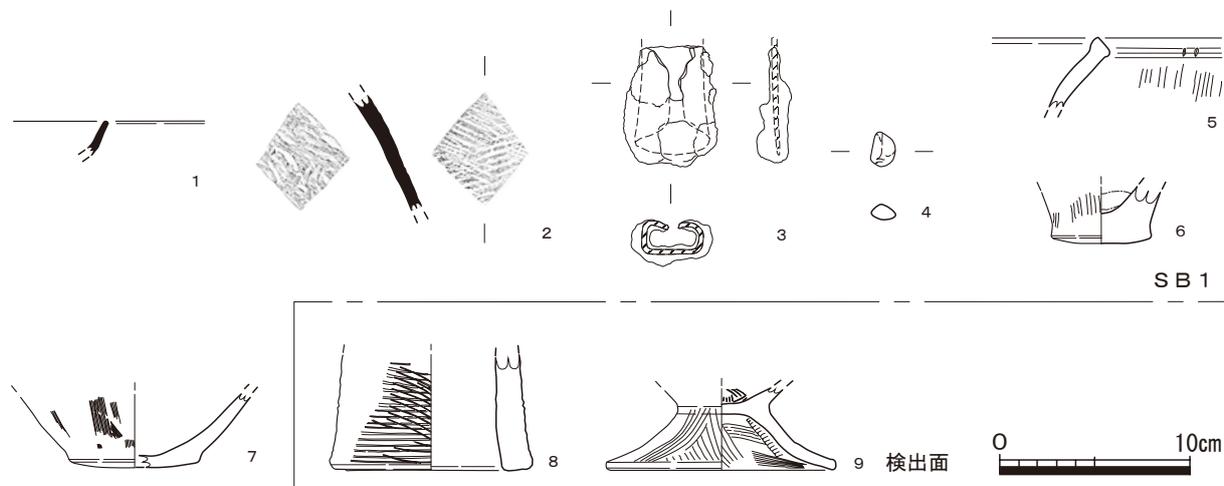


第68図 SB 1 P 2・3 土層断面図 (1/20)

（3）出土遺物（第69図、第5表）

今回の調査は開発予定地の敷地全体を対象に、約180㎡を調査した。上面確認を主体としたため、出土遺物は少なく、総量はパンコンテナ1箱分程度である。遺物は弥生土器や土師器、須恵器、金属製品などが出土した。以下、概要について述べる。

SB1P1から須恵器の坏（1）、P2からは鉄斧（3）、P3から丸石（4）が出土した。P5からは弥生土器の甕の口縁部（5）や甕の底部（6）、壺の底部（7）が確認された。5の口縁端部には刻目が施される。6の底部はやや丸みを帯びた平底である。須恵器の胴部片（2）は外面に平行文のタタキがある。壺の底部（7）は丸みを帯びた平底である。検出面からは器台（8）や脚部（9）も出土している。



第69図 出土遺物実測図（1/4）

第5表 出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)	外面	内面	外面	内面			
1	SB1 P1	須恵器	坏	—	—	(1.8)	黄灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子、黒色粒子を含む。		201722 000001
2	SB1 P6	須恵器	甕	1.85	1.2	0.8	灰 ～にぶい黄	褐灰	タタキ	タタキ	ほぼ精良。		201722 000006
3	SB1 P1	鉄製品	鉄斧	6.4	4.9	0.25	褐	褐					201722 000002
4	SB1 P1	石製品	丸石	2.0	—	(10.7)	にぶい赤褐					重さ1.85g	201722 000003
5	SB1 P5	弥生土器	甕	—	—	(6.0)	にぶい黄橙 ～灰黄褐	にぶい黄橙 ～灰黄褐	刻目 刷毛目 ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子、細砂粒を含む。		201722 000004
6	SB1 P5掘方	弥生土器	甕	—	—	(3.6)	灰黄褐 ～橙	灰黄褐 ～橙	刷毛目 ナデ	ナデ	赤色粒子、細砂粒を含む。		201722 000005
7	検出面	弥生土器	壺	—	(5.2)	(3.0)	にぶい黄褐 ～橙	にぶい黄褐 ～黒褐	刷毛目 ヨコナデ ナデ	回転ナデ ナデ	精良。		201722 000007
8	検出面	弥生土器	脚部	—	(6.8)	(3.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	刷毛目 ヨコナデ	刷毛目 ユビオサ エ	精良。		201722 000008
9	検出面	弥生土器	器台	—	(12.05)	(4.35)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	タタキ ナデ	ナデ	砂粒を含む。		201722 000009

## 4. 総括

今回の調査は専用住宅建設に先立つ確認調査であった。本調査地は久留米市合川町字古宮に位置し、東側隣接地は筑後国府跡 I 期政庁（国史跡）である。過去に行われた第102・130・157次調査では前身官衙及び I 期政庁に伴う掘立柱建物や溝、弥生時代後期後葉～古墳時代の竪穴住居や大溝、中世の遺構も多く確認されている。

### 総柱建物について

本調査では総柱建物を 2 棟検出した。291 S B 1 は、桁行 3 間×梁行 2 間の建物で、計画方位が真北（座標北）を示す。柱穴は楕円形及び隅丸方形を呈している。291 S B 5 については東西 1 間分を検出した。柱穴の規模は 291 S B 1 と同様で、同規模の建物になると想定される。最北の柱列のみ確認であるため、建物の規模や内容については今後の調査・検討を待ちたい。これらの建物は重複関係がなく、共伴関係については不明である。今回の調査では掘り下げを最低限に留めており、出土遺物の大半は柱穴を一段掘り下げた際に出土したものである。出土遺物は弥生土器および土師器・須恵器の細片であり、出土遺物からは時期決定には至らなかったが、軸方向や建物プランから、その性格や時期について以下のとおり検討を試みた。

周辺では同じ計画方位の建物が 8 棟確認されている。本調査地の東側隣接地における調査（第157次調査）では、総柱建物が 2 棟確認されている。そのうち S B 4141 は 291 S B 1 より南東に 15m の位置で検出された。S B 4141 は桁行 4 間（2.0+1.9+2.0+1.9m）×梁行 3 間（2.2+1.8+2.0m）で、計画方向は真北（座標北）を向き、柱穴は 0.8～1.4m の方形を呈している。造営尺は令小尺（1尺≒0.3m）が用いられている。291 S B 1 は、計画方位や桁行・梁行の規模、造営尺の点から S B 4141 に共通性が見受けられる。また、S B 4141 の東側に位置する S B 4242 および 157 S B 40 は、S B 4141 と建物規模や掘方規模、計画方位の違いが確認されている。計画方位や周辺の遺構の重複関係などから久文報第149集では S B 4142 と 157 S B 40 が併存し、S B 4141 が後出したことが示唆されている。S B 4142 の柱穴からは 8 世紀前半の須恵器の坏が出土している。これらを踏まえると、I 期政庁内に総柱建物が L 字状に配置されていた状況がうかがえる。

### 竪穴建物について

今回の調査では弥生時代の竪穴建物を 4 棟検出した。竪穴建物の特徴として、平面プランが長方形であること、方位軸が東に 30° 程度ふれていることがあげられる。また、遺構確認面や古代の遺構からの弥生土器の出土が多い。調査区の西に約 20m の地点では、南西から北西に走る大溝が存在し、その東西で弥生時代後期後葉以降の竪穴建物や掘立柱建物が大溝に沿うようにして確認されている。遺構行われた第157次調査では、22棟の長方形や方形を呈する竪穴建物が検出されており、弥生後期後葉～古墳時代の様相を呈する遺物が出土している。今回の調査区内でも弥生時代以降に形成された集落の広がりを確認することができた。（大隈）

〈参考文献〉

久留米市教育委員会 『筑後国府跡・国分寺跡—平成10年度発掘調査概要報告—』久留米市文化財調査報告書第149集 平成11年





第71図 調査区北部全景（北上空から）



第72図 調査区南部全景（南上空から）



第73図 調査区から高良川・筑後川を望む（南から）



第74図 調査風景（西から）



第75図 SB1 検出状況1（東から）



第76図 SB1 P2 土層（北から）



第77図 SB1 P3 土層（北から）



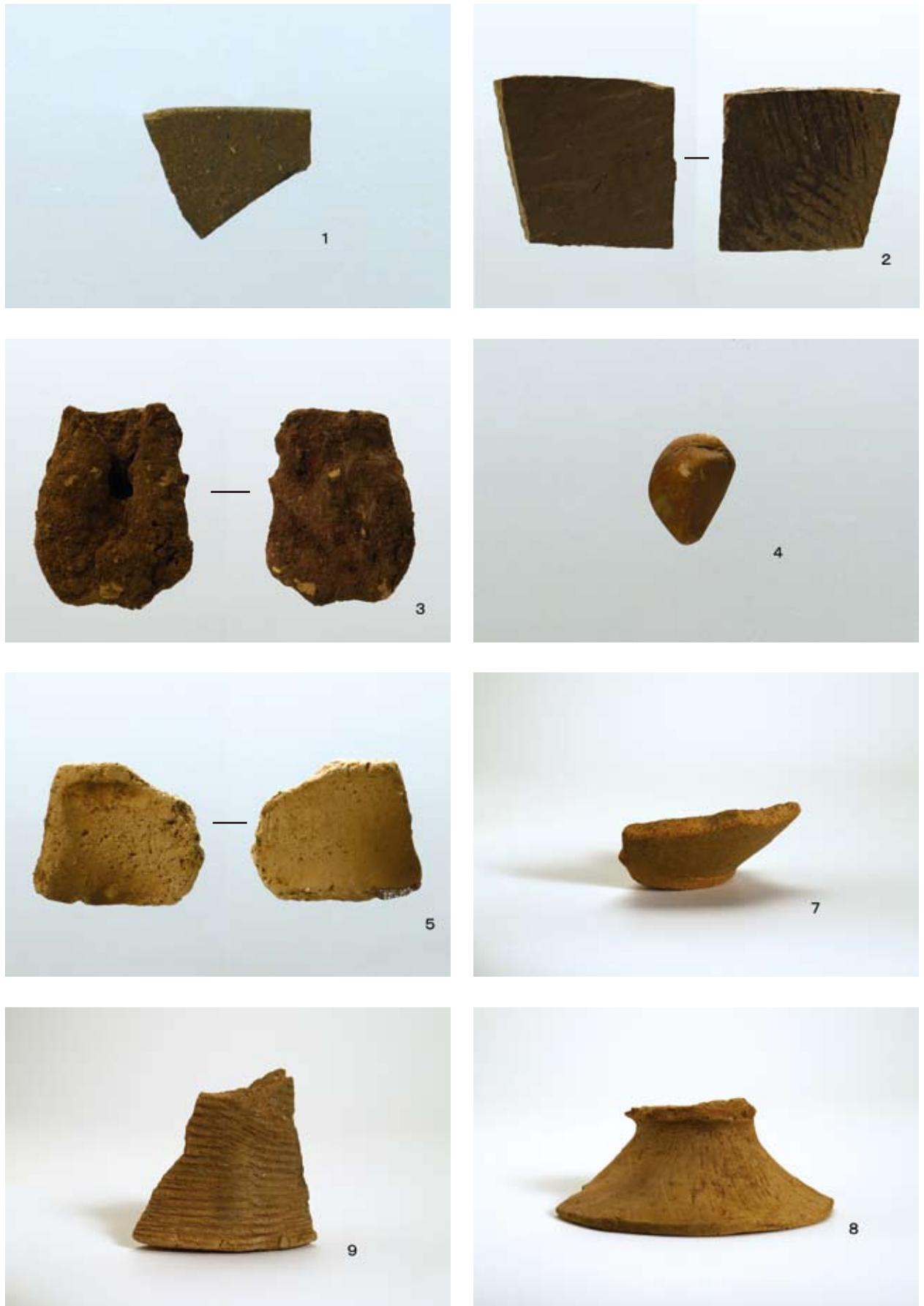
第78図 SB1 検出状況2（南から）



第79図 SB5 検出状況（北西から）



第80図 SB1・SB5 検出状況（北西から）



第81図 出土遺物写真

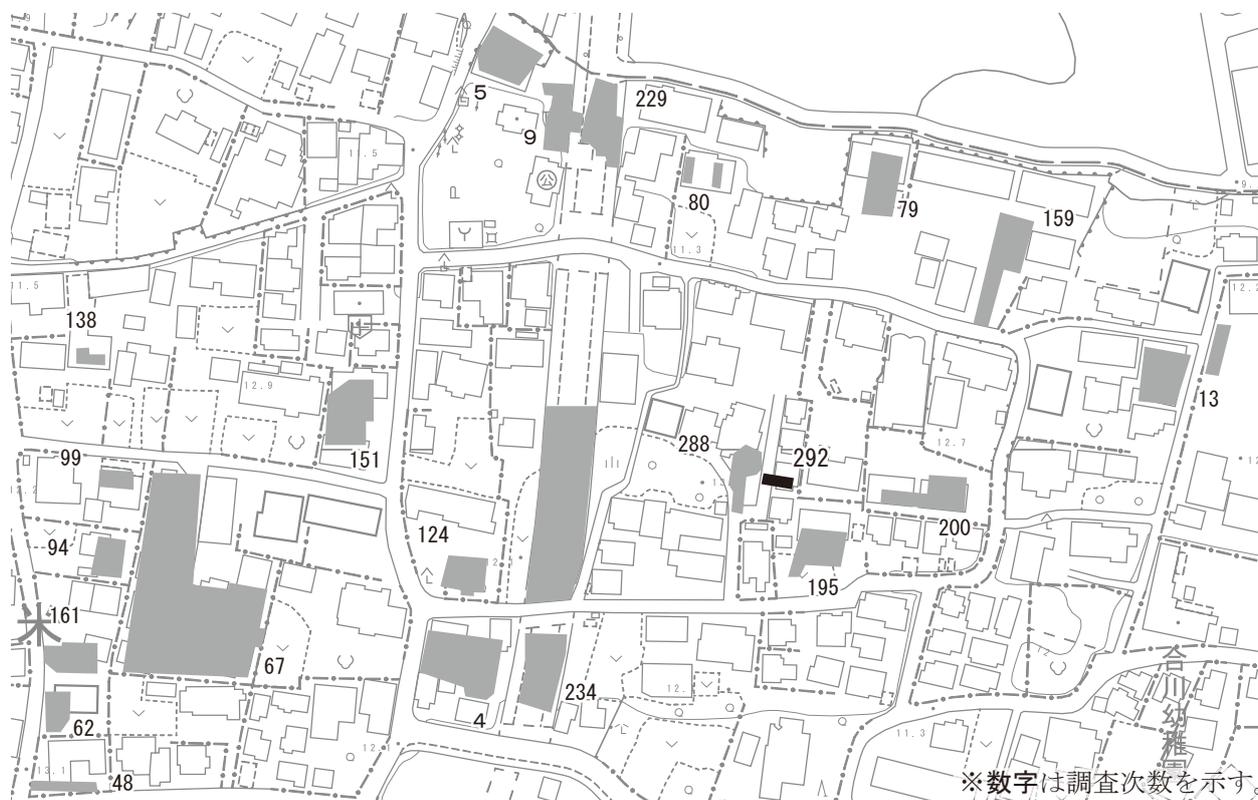
## VI. 筑後国府跡（第292次調査）

### 1. 調査に至る経緯

本調査は平成30年4月16日付で、土地所有者より久留米市合川町字東1085番7における、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会が提出されたことに端を発する。調査地は周知の遺跡である筑後国府跡の範囲内に含まれ、調査地を含む周辺は古代から近世にかけての遺構展開している。そのため、代理人との協議の結果、建物建設予定地の約85㎡について調査の対象とし、平成30年5月15日より調査に入る運びとなった。

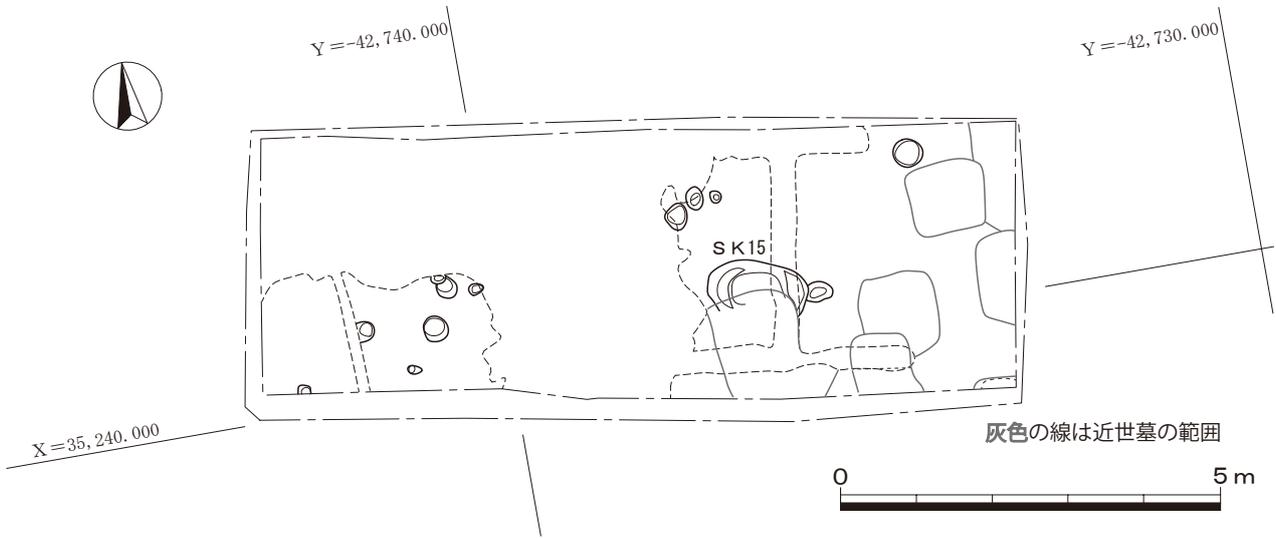
### 2. 位置と環境

筑後国府跡の地理的歴史的環境の詳細については第IV章を参照されたい。本調査地は第288次調査地の東隣にあたり、筑後国府の北部に位置する。第288次調査では中世や近世の遺構や、古代の遺物などが確認されたため、本調査地でも同様な成果が期待された。本調査は中世以前の遺構を対象として実施した。



第82図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2, 500)

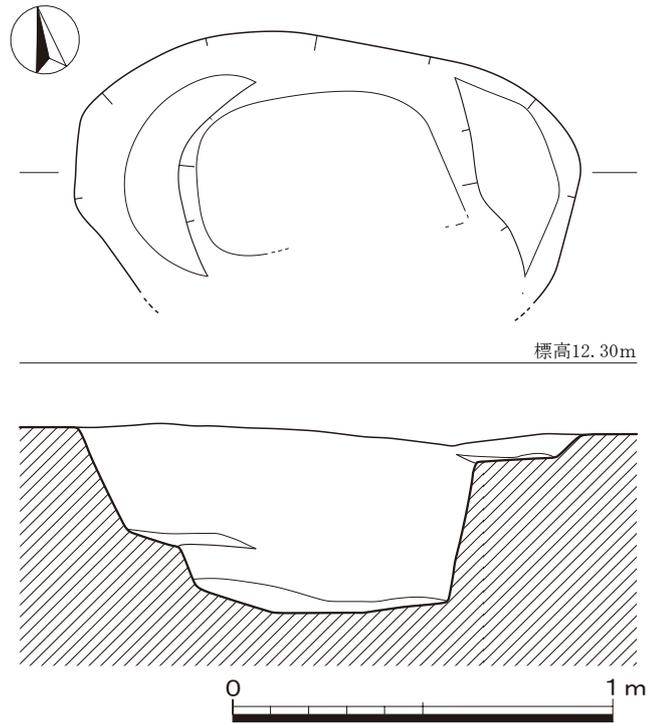
### 3. 調査の記録



第83図 遺構配置図(1/100)

#### (1) 調査の経過

平成30年5月15日、建物建設範囲に調査区を設定し、重機による表土剥ぎを開始する。地表下約30~40cmで遺構面を確認した。直ちに遺構の検出、掘削を行ない、個別遺構写真の撮影を順次行った。遺構密度は希薄であり、検出、遺構掘削の結果、近世墓や近代以降の攪乱が大半を占めることが確認された。全ての遺構を完掘した後、調査区全景を撮影した。埋め戻しと機材撤収を行って、5月22日に調査を終了した。また記録写真はモノクローム・カラーリバーサルともマミヤRZ67を用いて6×7判で撮影した。



第84図 S K15実測図(1/20)

#### (2) 検出遺構

第288次調査と同様に本調査においても包含層は確認できず、調査地の大半は攪乱による削平を受けている。検出した遺構は、古代の土坑1基、ピット数基、近世墓であった。近世の遺構は、今回調査対象外のため、近世墓について詳細な調査は行っていない。

## 土坑

## S K 15（第84・87図）

調査区中央部で検出された土坑であり、南部は近世墓に削平されている。長軸長1.3m、短軸長0.7m以上、最深部0.5mを測る。東部、西部にそれぞれ段を有する。土師器の坏・皿、黒色土器B類碗、緑釉陶器片などが出土した。遺物から12世紀前半に埋没したと考えられる。

## (3) 出土遺物

パンコンテナー1箱に満たない量の遺物が出土している。1～4はS K 15、5は攪乱から出土した。5は摩耗が著しい細片であるため、写真のみ掲載する。遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。



第85図 出土遺物実測図(1/4)

第6表 出土遺物観察表

遺物番号	図番号	出土遺構	材質	器種	法量			色調		調整		胎土	備考	登録番号
					口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1	第85・86図	S K 15	土師器	小皿	[7.4]	[5.8]	(0.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ナデ	ナデ	精良		201804 000002
2	第85・86図	S K 15	土師器	小皿	[7.6]	[7.1]	0.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ ナデ	ナデ	精良		201804 000003
3	第85・86図	S K 15	黒色土器 B類	碗	-	-	(1.8)	黒褐	黒褐	ミガキ ナデ	ミガキ	精良		201804 000004
4	第85・86図	S K 15	土師器	坏	[11.2]	[7.0]	2.9	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		201804 000005
5	第90図	攪乱	緑釉陶器	不明	-	-	-	灰白	灰白	-	-	精良	摩耗著しい 一部に釉残る	201804 000001

## 4. 総括

中世・近世において調査地点は枝光村の範囲以内に位置する。枝光村の存在は弘安3年（1280）「筑後国高良御宮在国司藤原永基先祖相伝所帯所職惣間職帳事（写）」に初めてみえる。「高良御宮在国司職」である草野永基の所領として「枝光村在家並田畠等」がみえ、田は高良社の修理工、農地は同社の五節句の供物、在家は竹野庄に属すると記される。また『高良玉垂宮神秘書』には高良社の祭祀を担う地域共同体の長である「十二人ノ乙名」のなかに「エタミチ（枝光）」の名が出ていることから高良社との関係が深い地域であることがわかる。

今回の調査では12世紀前半に属する土坑1基が検出している。枝光村の存在は13世紀後半から確認できるが、本調査地周辺における調査では11世紀から12世紀代の遺構を複数検出しており、この時期から枝光村が形成された可能性も考えられる。（小川原）



第86図 調査区全景（西から）



第87図 調査区東部完掘状況（北から）



第88図 調査風景（西から）



第89図 出土遺物写真

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせいさんじゅうねんど くるめしないいせきぐん
書 名	平成30年度 久留米市内遺跡群
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第405集
編著者名	大隈 彩未（編）・江頭 俊介・西 拓巳・小川原 励
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2019（平成31）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
いちのうえきたやしき 市ノ上北屋敷遺跡 第6次調査	ふくおかけんくるめし 福岡県久留米市 あいかわまち 合川町1877-28		40203	30110	33° 19' 8"	130° 32' 2"	20160912 ～ 20161013	120m <sup>2</sup>	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
市ノ上北屋敷遺跡 第6次調査	集落	弥生  近代	溝	1条	弥生土器、土師器、 陶磁器、瓦、石製 品、鉄製品		弥生時代の集落跡と近 世から近代の有馬別邸 跡を確認した。		
要 約									
<p>調査地点は筑後川左岸に形成された標高12mの低台地上に位置する。周囲には、弥生時代の集落などが多く認められる。今回の調査では、弥生時代中期の溝や竪穴建物、土坑を検出した。また、近代に廃絶した有馬別邸に伴う廃棄土坑を検出した。</p>									
土木工事の届出日	平成28年6月29日				遺物の発見通知日	平成28年10月18日 (28文財第1044号)			

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号							
しおいり 汐入遺跡 第4次調査	ふくおかけんくるめし 福岡県久留米市 やすたけまちすみよし 安武町住吉1399- 2の一部		40203	31102	33° 16′ 59″	130° 28′ 19″	20171030 ～ 20171110	68㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
汐入遺跡 第4次調査	集落	古代  近世	柱列 土坑 溝	1条 2基 1条	弥生土器、土師器、 須恵器、陶磁器、 石製品、鉄製品		古代の柱列と土坑を検出した。		
要 約									
本調査地点は、低台地上の標高9m地点に位置する。主な遺構として、古代の柱列1棟と土坑2基、近世以降の溝1条を検出した。掘立柱建物は東壁の2間分を検出し、遺構の大半は調査区外に延びると考えられる。土坑からは、土師器や須恵器、石製品、鉄製品が出土しており、周辺の第2～3次調査で検出された遺構との関連が示唆される。									
土木工事の届出日		平成29年10月12日			遺物の発見通知日		平成29年11月15日 (29文財第1176号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号							
ちくごこくふあと 筑後国府跡 第290次調査	ふくおかけんくるめし 福岡県久留米市 あいかわまちあざかきのうち 合川町字柿ノ内		40203	30112	33° 18′ 44″	130° 32′ 30″	20170904 ～ 20170921	159㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国府跡 第290次調査	集落 官衙	古代	道路遺構 土坑 ピット	1条 多数 多数	—		筑後国府域を横断する 道路遺構を検出した。		
要 約									
調査地点は、筑後国府跡Ⅱ期政庁に付随する国司館の東側に隣接する。今回の調査は、水道管改良工事に先立つ確認調査である。調査区は南北に約180mに及び、調査区の一部は国府域を東西に縦断する道路遺構SF3980を包含層直下において確認することができた。									
土木工事の届出日		平成29年8月4日			遺物の発見通知日		—		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
ちくごこくふあと 筑後国府跡 第291次調査	ふくおかけんくろめし 福岡県久留米市 あいかわまち 合川町1369-1		40203	30112	33° 18′ 53″	130° 32′ 15″	20180205 ～ 20180312	180㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国府跡 第291次調査	集落 官衙	弥生  古代	竪穴建物  総柱建物	4棟  2棟	土師器、須恵器、 鉄製品、石製品、 弥生土器		筑後国府跡Ⅰ期政庁に おける総柱建物を検出 した。		
要 約									
調査地点は、筑後国府Ⅰ期政庁内の中央南西よりの位置にあたり、東側隣接地は国指定史跡となっている。また、一帯には弥生時代終末期の古宮遺跡が広がっており、周辺における調査では、多数の竪穴建物や大溝などが検出されている。今回の調査では、2×3間の総柱建物1棟や弥生時代終末期の竪穴建物群を検出した。中でも総柱建物は、柱掘方が1辺1mを越す方形掘方を有し、大型の建物である。東側隣接地で実施された第157次調査では、同様な総柱建物が2棟並列して検出されており、これらが同時期とすると、政庁内に総柱建物がL字状に配置されていた状況がうかがえる。									
土木工事の届出日			平成29年11月10日			遺物の発見通知日		平成30年3月19日 (29文財第1697号)	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
ちくごこくふあと 筑後国府跡 第292次調査	ふくおかけんくろめし 福岡県久留米市 あいかわまち 合川町1085-7		40203	30112	33° 19′ 1″	130° 32′ 27″	20180515 ～ 20180522	85㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国府跡 第292次調査	集落 官衙	古代 ～中世	土坑  ピット	1基  12基	土師器、緑釉陶器		12世紀の土坑を検出した。		
要 約									
調査地点は、筑後国府跡の北部に位置する。西隣に位置する第288次調査と同様、近世墓など近世以降の掘り込みによって削平を受けて遺構の大部分が消滅していたが、12世紀の土坑が検出された。									
土木工事の届出日			平成30年4月23日			遺物の発見通知日		平成30年5月25日 (30文財第284号)	

平成 30 年度

## 久留米市内遺跡群

---

久留米市文化財調査報告書 第 405 集

平成 31 年 (2019) 3 月 31 日 発行

発行：久留米市教育委員会

編集：久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷：中村印刷有限会社

---

平成三十年度 久留米市内遺跡群

久留米市文化財調査報告書 第四〇五集

平成三十一年

久留米市教育委員会